
トイレットペーパー戦争

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トイレットペーパー戦争

【Zコード】

Z72730

【作者名】

国高コウチ

【あらすじ】

向坂藍は自称根暗で無口な女。佐倉葵は学校で最強と名高い番長様。色んな意味で擦れ違う二人のじれじれ勘違いストーリーです。他にも色々なキャラクター登場予定です。

* 女の子総受けで、不定期更新です。

素敵な挿絵を頂きました！（前書き）

ごんたろう様から頂いた嬉しい一人のイラストです。w
本当に小説以上に素敵に描いていただいて、ありがとうございます
！！

幸せですー。w w

素敵な挿絵を頂きました！

Λ.Η.14992 — 2084 Λ

トイレットペーパー戦争の葵君と藍ちゃんの素敵イラストを「」んた
るひせんから頂きました。w

イメージぴったりな絵を、ありがとうございます！！

トイレットペーパーを投げる番長と、怒りに震える藍ちゃんの姿がとても素晴らしく表現されたのです。

擦れ違いまくりな彼らの想いを書くなれば・・・

葵『こっち振り返んねえかな・・・振り返るといいな・・・てか振り返つてくれ、マジで』
藍『禿げる。マジで毛根が死滅する。宣教師へアになる。勘弁、本気で勘弁してください』

でしょうか（笑）

トイレットペーパー戦争

私の名前は向坂藍むきさかあい。

至つて一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校二年生である。

性別は女だが腰を超える黒髪以外は性別を証明する術を持たない、すとんとしたスレンダー（ここ強調）な体つきをしている。

自慢じゃないが根暗な性格をしており、テレビから出でてくる某ホラー女のような外見のおかげか、それとも極度の口下手が災いしてかこのクラスに友達は一人も居ない。すいません、少し見栄張りました。このクラスだけでなく学校に友達は一人も居ない。

友達は居ないが試験の最中だけ知り合いが増えノートが消えていく、それが私のポジションだ。

鳴かず飛ばずを体現しているような私だが、最近とても深刻な悩みがある。

そしてそれは、先ほどから後頭部に直撃しているトイレットペーパー（何故そのチョイスか判らない）を無言で投げ続ける男にある。

いや、別に後ろを振り返つて確認したわけじゃないが、絶対にその男がやっていると確信している。

だつてさつきから全力で救難信号を出しているのに、先生は顔から滝のような汗を流して視線を逸らしているし、明らかに突っ込み部分が全開なのにクラスメイトは誰一人として突っ込まない。

おかげで足元には投げられたトイレットペーパーの屑がたまりつつあるし、どうせこれを片付けるのも私かと思うと心から憂鬱にな

る。

そして私の憂鬱をさりげなく貯蓄していく男は私の席のすぐ後ろに着席していた。

その名も佐倉葵。さくら 苗字も名前も可愛らしいが、本人は可愛さと正反対の位置にいる。見た目は頑強なアメリカンフットボーラーだ。私の貧困な発想から出る彼の体型に対する最大の表現はこれに尽きる。

太く短い首の上には、有り得ないくらいの三白眼と太い眉が存在している。坊主一歩手前に刈り取られた髪型と耳に開けられた複数のピアス。身長は小柄な私の優に四十センチは上を行く。明らかに只者じやないオーラを撒き散らすこの男。時代錯誤もいいところだが、私の学校に存在する番長と呼ばれる男だつたりする。

冗談抜きで喧嘩上等を素で口にする男だ。実際一度だけ私も彼が喧嘩をしているのを見たことがあるが、それはもう怖かつた。何が怖いって凶悪に歪められた顔や、楽しげに弧を描く唇、振り上げられた拳についた血とかそんなものではなく、その一方的な強さに怖気が立つた。

小心者の私は暫く惚けて見ていたが、我に返った瞬間にどうすればいいか必死に脳を働かせた。それはもう、これほど必死に何か考えたことはないと語れるほどに、フル回転だ。結果私は持っていたハンカチを犠牲にし、そこに番長の意識がそれた瞬間ダッシュして逃げた。そしてそれは何気なく三年も前の出来事だつたりする。

そう、私は運が悪い事に番長と同じ中学出身だ。折角県内でも有数の進学校へ進んだのに、自由が校風の学校で自由すぎる学園生活を送る番長は頭の出来も宜しかった。

それでも私と彼の接触は今まで無かったのだ。

クラス替え

で、同じクラスになるまでは。

アイウエオ順などと捻りも何もない座席順で並べられた机をこれほど怨んだ日は無い。おかげで後ろから一番目の席の私は、同じサ行の番長の前になってしまった。短い人生であれほど絶望した日もないだろう。

考へても見て欲しい。友達居ない暦更新中の私が新たなクラスに進級したのを期に、心機一転頑張るつもりだったのに、後ろの席が番長。折角後ろから一番目とこつ高ポジションであるのに、後ろの席が番長なのだ。

どうすればいいの学園生活。これじゃ我苦延生活の当て字の方がしつくり来てしまう。

しかも何を考えているのかこの番長、不良なら不良らしく授業をサボればいいのに毎回出席した挙句、人の後頭部に物を投げつける奇癖を持ち合わせると来たもんだ。

レディの頭に物を投げるなど教えてもらわなかつたのか。いや、私如きレディとは言えないかもしけないが、チビな私は彼の視界を邪魔するわけでもないだろうに、何ゆえ！ここまで激しく後頭部にものを投げられなくてはいけないのか。

いや、確かに初日の消しゴムよりはマシだけども。投げては拾いを繰り返していたあの日より番長的にもマシだひづけど、いい加減にして欲しい。

しかし哀しいかな小心者で口下手な私は今日も黙つて前を向き続

ける。

気にしては駄目だ。気にしては駄目だと心の奥で呪文を唱えながら。

気がつけばノートに板書されているのが黒板の授業内容ではなく魔方陣だつたとしても誰も私を責めれまい。むしろ助ける気がないくせに責めやがつたら許さん。この番長を熨し付けてくれてやる。

ぎりぎりぎりとシャープペンで出る濃度の最大の濃さでノートを取っていた私は、不意に後頭部に受ける衝撃がなくなつていてのに気が付いた。

慌てて床を見ると、トイレットペーパーで肩の山が出来ていた。それを瞳に映した瞬間、密かにガツツポーズを取る。やつた。私は奴に勝つた。ついに手持ちのネタが尽きた奴は、攻撃手段を失つたのだ。

これ幸いに黒板を眺め猛烈な速さでノートをとつていく。記憶と速記は数少ない取り得の一つで、気分が良いと筆も進んだ。しかし、それも束の間のことだつた。

ひとつん、と頭に衝撃を受け、軽い音を立てた何かが私の机に転がつていく。

コロコロコロと間抜けな音を立てたそれは、トイレットペーパーの芯だつた。

ぶつん、と頭の中で何かが切れる。

「先生」

「な、何だ！？」

席を立ち上がり静かに声を発すれば、面白いほどに震えた声で先生が返事をしてきた。

僅かに俯き下から睨み上げるよう先生を見て、にっこりと微笑む。こんなすがすがしい笑顔を浮かべたのは何年ぶりか。極度の人見知りゆえに外で笑うなど思い出せない過去だ。

音を立てる勢いで固まる先生に私は肅々と申し出た。

「ちょっと失礼」

「は？」

返事も聞かずに教室を飛び出す。

これ以上無いくらいの速さでトイレに駆け込むと、新品ではなく使用途中のそれをトイレの中からぶん取つてきた。新品など奴には勿体無い。

そして教室に入ると自分の席の前まで歩く。

そしてやや驚いたように三白眼を見開く番長に、にこりと柔らかに微笑んだ。

「小市民舐めんな！」

その日、三年の期間を経て、私は初めて番長と向き合つた。
そして番長の顔面に全力でトイレットペーパーを投げつけた女と
して、私の名前は不名誉にも学校中に広がつたのでした。
そう言えば、学校で三言以上話すのも久しぶりだった気がする。

トイレットペーパーに想いを乗せて（前書き）

先回の葵君視点です。

トイレットペーパーに想いを乗せて

俺の名前は佐倉葵。さくらあおい。

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ついたつて普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払つていただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまつた。

もつともそれは中学時代も同じだつたので慣れた展開だ。厳つすぎる顔や、でかすぎる体、そして発するオーラが気に入らないと因縁をつけられるのだが、そんなものどうしようもない。

下らない因縁をつけてきた奴らは、一度とそんな口が聞けないよう丁重に相手をしてやつてている。おかげで今ではどんなに混んでいる昼の購買も姿を現すだけで人が避けてくれる。顔面神経痛かと聞きたくなるくらいに引きつった顔をした奴らを尻目に、最高峰と名高い焼き蕎麦パンを手にするのが最近の密かなブームの一つだ。

高校も一年に入り心機一転、最近の俺は新たな気持ちで学園生活に挑んでいる。

去年まではサボりがちだつた授業も毎回きちんと出席している。授業に出ると説教を垂れていた教師があまりの真面目つぶりに病気かと問い合わせてくるくらいに。

だが教えてやるつもりは欠片もないが、それにもきちんと理由がある。

そもそも俺がいかにも肌に合いそうに無いこんな進学校を選んだのは、俺の野望を達成するためだ。校風が自由とか進学先が有名大

学とか、就職率の高さとか、そんなのは始めから歯牙に掛けてない。

県内屈指と名高いこの高校のその自由度の高さのために狭き門だ。勉強さえ出来ればある程度の自由が認められ、髪を染めたり制服をアレンジしても口煩く言われない。

さすがに俺みたいに出席率ギリギリまでサボったり、喧嘩上等と片つ端から受けて立つと呼び出しの憂き目にあうが、それでもまだ退学に至っていないのは偏に俺の成績が上位に食い込んでいるからだろう。この学校で上位ということは、将来有名大学へ進学は保障されたようなものだ。多少の問題があつても、将来性を買われ不問となる。

一年の時は学力を平等に伸ばすためと称してランダムにクラス分けされるが、一年に上がると学力別にクラス分けがされる。俺が選んだのは理系。そして成績から自動的に理系の特進クラスへ割り振られた俺は、今年漸く密やかな野望を達成した。

視線をすっと斜め下にやる。俺よりも四十センチ以上身長が低い彼女はそうじないと視界に全てを収められない。

今時染められていない腰を超える豊かな黒髪に姿勢よく伸ばされた背筋。髪の間から覗く耳は雪白で、触れれば折れてしまうんじやないかと思えるくらいに華奢な体型をしている。体つき同様顔も小さく、小作りなそこには長い睫毛に装飾されたオニキスの瞳が存在する。ちょこんとした鼻に貪りつきたくなるふくらとした唇。

男であれば誰もが庇護欲を搔き立てられる。そんな全てを表現した理想の女がそこに居る。

彼女の名前は向坂藍。さきせかあい。

子ウサギのように警戒心が強く、無口でとても大人しい性格をしている。その声を聞く機会は教師に指名されたときくらいしかなく、たまにそれ以外で発言しても三言以上は話さない。

彼女の基本スペックは『はい』『いいえ』のYES/NO枕のような一択だ。

表情も大きく動かず、僅かに眉をしかめた顔か、もしくは無表情で俯いているか。楚々とした仕草でのんびりと行動し、独特のペースのおかげか彼女に自分から声を掛ける猛者は中々居ない。

ちなみに抱きしめたくなるような愛くるしさを持つ彼女に懸想する男は中々の数が存在するが、互いに牽制しあつて結局親しくはないのが現状だ。女どもは並んで比較されるのが嫌だとか普通に憧れるとかで遠巻きにしているし、とにかく彼女を別格と見ていた。

それも仕方ないかもしれない。

見た目もいいが、スペックも凄いのが向坂藍だ。試験を受ければ常に首位。スポーツをすればぶつち切り。ならば料理が苦手とか裁縫が苦手とか何かあるだろうと思うが、家庭科の授業の成果を噂で聞くとそれもなさそうだった。

さらに解剖の授業では男ですらびびる蛙の解剖を表情一つ変えずにこなした伝説もある。男よりも男らしいとある意味名を馳せていた。

可愛くて格好よくて頭良くて運動神経抜群。どれだけ超人なんだと突つ込みたい彼女は、実は俺の三年越しの

片想いの相手だつたりもする。

実は同じ中学校出身だつた俺と向坂藍なのだ。

中学一年の初めに転校してきた彼女は、今も小さいが今よりももう少し小さかつた。

真正面から顔を合わせたのも話をしたのも一度だけ。
けれど俺は、その一度でどうもなく彼女に恋してしまった
のだ。

その日も懲りもせずに喧嘩を吹つかけてきた相手を血祭りにして
いる最中だった。

まだ成長期だつた俺の体はその当時180前後しかなかつたが、
それでも喧嘩相手の自称先輩方に苦戦というほど梃子摺りはしなかつた。

売られた喧嘩は徹底的に、反撃する気もしないくらいにボコるが
俺のモットーだ。逆らう気が起きないくらい、訴える気を萎えさせ
るくらいにとことん翻つ刃くじで、不意に背後から視線を感じ
じた。

襟首を掴み先輩Aを持ち上げ、足の下に呻いでいる先輩Bを踏み
つけながら振り返ると、そこにほほ子ウサギを髪髷とさせる小柄な美
少女が立っていた。

黒々とした大きな瞳をより大きく見開く様は、零れ落ちてしまう
のではないかと心配してしまつくらいで、真っ白な肌は僅かに青褪
めている。鞄を胸に抱き堪えるように唇を噛み締めた彼女は、思わ
ず手を伸ばして抱きしめたくなるほど俺の中の何かを操つた。

唐突な感情の到来に田を見開いて固まっていると、我に返つたら
しい彼女は凄い勢いでポケットを探るとハンカチを取り出した。

『これ、使ってくださいーー！』

『は？』

無理やりに押し付けられたハンカチはウサギのワンポイントの刺
繡がしてあり、それに気を取られた瞬間に素晴らしい勢いで彼女は
走り去つていた。翻るスカートから覗く白い肌がとても眩しかった
のを覚えている。

俺としては怪我をするのは日常茶飯事だつたし、その際怯えて逃
げられてもハンカチを差し出すなんて優しさに触れた事はない。

喧嘩中の俺は悪友すら怯む凶悪面をしているという。それなのに、
ふるふると震えながらハンカチを差し出すなんて、どんな女神だ。

すとんと呆氣なく紐無しバンジーの勢いで恋に落ちた俺は、三年
間の間ずっと彼女と親しくなるチャンスを探していた。

そうして、ついにこの絶好のポジションを得たのだ。

今まで佐倉葵という名にはコンプレックスしか持つてなかつた。
名前も苗字も女のようだ怨んでいたが、彼女と席が前後するなら、
こんな僥倖は無い。

毎日毎日登校すればすぐに前に愛しい彼女の姿。これで真面目に授
業に出なくてどうするのだ。

中学一年までは中の中をウロウロしていた成績を、死に物狂いで上げたのは、彼女と同じ高校に入るためだ。転校してからずっとオール満点に近い成績で主席を突っ走る彼女が選ぶ高校は限られていた。中学卒業と同時に縁が切れるなど耐えられず、だからこそ昼夜問わずに努力した。授業をサボつて参考書を漁り、屋上で一人単語を記憶。三年になれば内申のために眞面目に授業に出たり、先生の間を回つたりした。

努力に努力を重ねて得たこの席を、俺は絶対に譲る気は無い。
このさき席替えなどという暴挙を許す気はないし、いつそ住み込みたいくらいだ。

だが折角の好ポジションを得たものの、同じクラスになつて一月、彼女と俺の間に発展は無い。
何故なら極めて無口な性質の彼女と、自分から話しかけるほど話題の無い俺。

プリントの配布の時にちらりと見える横顔に焦がれるのみで、全く接触する機会が無い。

俺は考えた。考えて考えて考えて、奥手の俺でも出来る手段を思ついた。

それがこれ、背後の席から気がついてアピール。
後ろの席だからこそ出来るアピール方法は至つて簡単。背後から消しゴムなどを飛ばし、落ちたところを拾つてもらつという斬新なアイデアだ。

一画期的な閃きを俺はすぐさま実行した。そう、まずは何を投げるかだが、思案して消しゴムとした。

投げる際手に力が籠り後頭部直撃してしまったが、今更あとに引けない。

後頭部への衝撃にびくり、と体を震わせる彼女に目を細め、俺は来るべき瞬間を待つた。

何が当たったのかと視線を巡らした彼女は、床に落ちている消しゴムに目をやり暫し動きを止める。

五分ほど考え込むようにそれを眺めていたが、徐に俺の消しゴムに手を伸ばすと、自分の席に持つていつてしまつた。

予定外の行動に焦つていると、前から白くて小さい手が机に置かれる。

戻ってきた俺の消しゴムには、律儀な文字で『落としましたよ』と書かれた手紙が巻きついていた。

彼女そのものを表すような纖細で流麗な字体に見惚れつつ、文字も綺麗なのかどうかとつとつとする。宝物にしようと顔を綻ばし、そそくさと筆箱に仕舞つた。

一時間ほどぽやんと幸せに浸つていたが、不意に俺は気がつく。俺の目的は何一つ達成されていない。

俺は話しかけて欲しいのだ。そこから色々と膨らませ、あわよくば男女の関係になりたいのだ。

華奢な体を思い切り抱きしめ、大きな瞳に俺の姿を映し、その愛らしい顔で微笑みかけて欲しいのだ。

自分のふがいなさに舌打し、俺は第一段を手に取つた。消しゴムは失敗したので今度は定規だ。シャープペンも考えたが、あの先っぽが刺さつたら危ない。僅かでも怪我をさせたくないの、鑑で定規の角を削ぎ落としてからそれを構える。

せいや、とばかりに投げれば、また彼女の後頭部にこん、と当たつた。

その音は思ったよりも教室に響き、何事かとクラス中の視線が集中する。田を丸くしてこちらを見る教師やクラスメイトを睨み付けると、彼らは一斉に顔を逸らした。

一方頭に定規が当たった彼女は、静かに黙り込んでいた。身動きせずに黒板を向いていたかと思うと、また不意に視線を床に落とす。そうして見つけた定規を取ると、先ほどと同じようにして俺に返却した。

ほくほくした気持ちで巻いてある紙を解くと、そこには一言『気をつけてください』。やはり綺麗な字が書かれていて、俺の宝物は一つに増える。

そうしてまた時間が経過し、気がつけば一日が終わっていた。

翌日から俺は考えた。万が一にも怪我をしないようにハンカチでぐるぐるに巻いたノック式のペンを投げたり、拾われるとすぐに終わってしまうので消しゴムを乱切りにして一個一個投げたりと一生懸命工夫した。

その甲斐もあつてか、毎回律儀に返却されるそれらには紙がしつかり巻きついており、俺の宝物もどんどん増えた。

しかし、一週間ほどたったある日、巻きついた紙に俺は目を丸くした。

『後頭部が痛いです』

訴えに俺は動搖した。確かに投げたもの一つ一つはダメージは大

きくないかもしない。それでも蓄積すれば痛みはたまる。

しかしながら俺としては折角得た「ミニコニケーションのチャンス」を棒に振るのも嫌で、どうすればいいか徹夜して悩んだ。その結果俺は名案を閃いたのだ。

翌朝、学校に登校すると同時に合鍵を使い保健室へと入り込む。そこに常備してあるはずの田代のものを見つけると、ホクホクでそれを教室へと持つていく。

アイテムの名はトイレットペーパー+ロール入り。彼女に当てるので勿論新品で封が空いていないものだ。

これなら痛くないだろうし、その上嬉しい事に長持ちだ。それに紙だから文字を書くことも出来る。今までの返事を書いたら喜んでくれるだろうか。

機嫌よく席に着いている俺を見た隣の席の男が悲鳴を上げたが、それくらいは赦してやれる機嫌の良さだ。彼女の反応が楽しみで仕方ないと、気分よく授業の開始を待つた。

最近の彼女は授業時間すれすれまで席に着かない。何処に行つているか知らないが、親しくなった暁には教えてもらいたいものだ。

授業が始まると俺はすぐにトイレットペーパーの封を切った。

記念すべき最初の一口ホールは、右上段の端に置いてあつたものにする。手に取るとミシン目に合わせて切り、サインペンを取り出した。本当はカラフルな色ペンがいいのだろうが、俺が持っているのは赤と黒だけだ。

少しでも好意を訴えるならやはり赤かと思い、ぽきゅんと間抜け

な音を立てて蓋を取る。何を書こうか暫し迷い、文章ではなく記号にした。所謂『ハートマーク』。芯までしっかりと塗りつぶすと、少しだけ形が崩れたが中々の出来だと満足できた。

それをくるくると丸めていつもどおりに投擲する。

びくり、と体を震わせた彼女は、視線を彷徨わせ床の上にトイレットペーパーを見つけ目を丸めた。

大きな瞳が驚きで見開かれる様はやっぱり可愛い。今すぐ腕にぎゅうぎゅうに抱きしめて頬擦りしたいがその衝動を必死に抑える。そんなことをしたら恥ずかしがり屋の彼女に嫌われてしまう。

早く拾ってくれとワクワクしながら待っていたが、暫くじっとそれを眺めた後、彼女はノートへと向き直った。猛烈な勢いで何かを書き始めたが、どうしたのだろう。いつもなら拾つて返してくれるのに。

不思議に思いながら第一段、第二弾と投下していく。
しかしながら望むリアクションを得れないまま、本日最後の授業へと突入してしまった。

朝からずつと定期的に投げ続けたトイレットペーパーの残りは後わずかだ。一日一口ールなら後十一日は持つと思いながらも、返事がないならまた消しゴムや定規に変えた方がいいだろうかと僅かに悩む。

俺の思いの丈は最早床に散乱し、休み時間に勝手にゴミと判断した拳銃捨てようとした生徒を睨み倒すほどに貯まっている。報われない想いの行き場のようで何だか切ない。

ため息を吐きつつまた新たにペーパーを取ろうとし、感触がなくなっているのに気が付いた。どうやら紙もつきましたらしい。俺の手の中にあるのは柔らかな彼女の肢体ではなく、身包み剥がされて滑稽な様のトイレットペーパーのなれはてだけだ。

暫し指でそれを弄ぶと、もう一度サインペンを取り上げる。書きたいことも伝えたいことも、たつた一言。

『好きです』

トイレットペーパーの芯にこれまでと比べ物にならないくらいの小さな文字で書くと、想いよ届けと投擲した。

「うん、からじゅから。

彼女の後頭部に当たったそれは、床に落ちるのではなく奇跡的に彼女の机の上に転がる。

教室中の視線が彼女へ集中した。誰も何も言わず、針を落として響きそうなくらい室内は静まり返っている。

一体何がどうしていきなり周りが動きを止めたのか知らないが、俺はただ一心に彼女がどう動くかだけに気を取られていた。静寂に支配される中、不意に彼女が動いた。

「先生」

「な、何だ！？」

挙手をした彼女は流れるような動きで席を立ち上がると教師へと声をかけた。彼女から誰かに呼びかけるなど滅多にないのに、その幸福を挙した教師を睨み付ける。ぎくりと体を強張らせた教師は声を震わせやつとのことで彼女に返事をした。

静まり返った中でも臆することなく綺麗な声を響かせる彼女にうつとりと見惚れないと。見惚れないと。

「ちょっと失礼」

「は？」

啞然とする周囲も構わず彼女は教室から飛び出でていった。誰も止めることができないくらいの早業で走つていった彼女は、僅かに頬を上気させ息を切らして帰ってきた。

淡く染まる頬が何とも艶っぽく愛らしい。食べてしまいたいとう望みと、他の野郎は見るんじゃねえと沸き起る嫉妬で翻弄される。

だが教室に戻った彼女は他の誰にも田もくれず、俺だけを一直線に見詰めていた。

ついに想いが届いたのだろうか。

姿勢を正してゆっくりと歩いてきた彼女は、俺の数歩前で足を止

めると、それはそれは輝かしい笑顔を浮かべた。

初めて見る笑顔は想像していたよりずっと可愛く、締め付けられる胸に呼吸困難に陥りそうだ。何も出来ずにただ見詰めていると、徐に手にした何かを彼女は振りかぶった。

「小市民舐めんな！」

絶叫と共に投げられたのは、つい先ほどまで俺が投げていたものと同じ『トイレットペーパー』。

柔らかな髪で出来るくせに、顔面にヒットしたそれは中々の威力を込めていた。

ふぐつと変な声が漏れる。この衝撃は、もしかしたら鼻血が出るかもしれない。いや、男として好きな子の前で鼻血はない。気力で堪えてい視線を上げると、フーフーと毛を逆立てる子猫のように煌く瞳で彼女がこちらを見詰めていた。

あれ？これってフラグが立つた状況？

乱れた髪が頬に掛かり、それを掌で搔き上げる。ふさりと揺れる黒髪の動きすら見惚れずに居られない。

苦節一月と一週間。

漸く声を掛けて貰えて、俺は恋のステップを一つ上つた。

続・トイレットペーパー戦争

私の名前は向坂藍。

至つて一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校一年生である。

クラスの中に一人は居る友達も出来ない根暗なタイプが私であり、今日も今日とて会話らしに会話など一つもせずに一日が終わる。

小学校の時分から親友を作るのが夢なのだが、どうやら今日も叶いそうになかった。ちなみに長年想いが募るだけあり、私の親友への理想は高い。

栗色の緩く癖のついた髪をした私とは正反対なタイプの明るくて可愛い子が私の理想だ。何をしてもトロい私と違い、爽やかなスポーツ少女だと尚いい。グランドで部活中、ふと顔を上げた瞬間に目が合えば、にぱっと破顔して両手を振ってくれるような、そんな子犬系の女の子が欲しい。

しかし根暗な私と元気少女のとは全く繋がりがなく、めぼしい子に目をつけたとしても距離は縮まらない。

そして距離を近づけたくもない男との距離がじわじわと縮まつていくのだ。

私の妄想をかき消すように、今日も今日とて後頭部に衝撃が走る。初めの頃のように消しゴムや定規は飛んでこなくなつたが、ある意味それ以上屈辱的なトイレットペーパーがくしゃくしゃに丸めら

れて飛んでくる。

身体的な痛みこそないが、精神的な面でのダメージは計り知れない。

だつてトイレットペーパーだ。名前の如く彼らはトイレを住まいにし、用を足した後に利用するものなのだ。トイレ 자체が目茶目茶清潔というイメージがない。そりやたまに高級ホテルとかに足を踏み入れるとその美しさに目を見張るが、ここは学校だ。学校のトイレなどその道のプロでもなんでもない学生が洗うものだ。消臭剤すら安っぽい、長年の汚れが染み付いた場所。

一応どこから手に入れてきたか知れない新品を利用しているが、入手場所がわからないだけに安心できない。まさか家から持参したとは思えないが、大体一日一口ール使うとして、彼の手元には残り七つは残っていた。

初めてトイレットペーパーを投げられてから早一週間。先週の月曜から始まつた奇怪な行動は、特進クラスだけで行われる土曜の授業を除き延々と続いている。

ちなみに土曜にトイレットペーパーの襲撃がなかつたのは、単純に襲撃者が学校に来てなかつたからだ。『奴』は今年に入つてから一度も特別授業に参加しておらず、教師もクラスメイトも誰一人として進言していないため、私にとつてその日は唯一の学校での安息日になつてゐる。

そして平和な日曜を挟んでの月曜日。

彼の奇行は相変わらず続いており、もう呪いか何かかと疑いたくなつてきた。

初日は流石にぶちきれた私は、奴 恐怖の大魔王もとい、恐怖を募らせる番長の佐倉葵の顔面に向け、女子トイレットペーパーを全力投球した。しかも顔面狙い。

当たつた瞬間気分は爽快だった。

何しろそれまでの一週間、延々と後頭部を襲撃する物体を黙つて受け入れていたのだ。あの、強面番長に逸し報いてやつた瞬間の気分の良さつたらない。

しかしそれは本当に一瞬の快感だった。

息を整え我に返れば、あの空恐ろしい三白眼をきりきりと細め、獲物を狙う肉食獣のように喉を鳴らしかねない凶悪な顔をした番長は、まるで呪いでもかけるかのようにゆるりと口角を上げた。天下の悪役も真っ青だよ！と絶叫したいくらい極悪な表情を見た瞬間、私は泣きたくなつた。

一瞬の喜びは本当に一瞬でしかない。彼の前では悪魔もないて逃げ出すはずだ。それくらい怖かった。

忘れないのに心のシャッターでメモリーに刻み込まれてしまつたあの笑顔は、毎夜私を唸らせる。何が怖いって眠つた後に夢まで出演する奴の執念が怖い。

すっかり萎縮した私は、もつトイレットペーパーを投げられようが、その芯を投げられようが無抵抗主義だ。嘗て平和のために無抵抗を貫いた偉人がいるが、彼に倣つて貫いている。

例え後頭部が将来禿げようとも、握っているシャーペンが折れようとも、私は無抵抗だ。

それなのに、ああそれなのにそれなのに。

何を考えているのか、今日も今日とて悪魔は私にトイレットペーパーを投げ続ける。昨日チラリと見てしまったが、彼が投げたトイレットペーパーには赤いペンで描かれたと思しきハートがあった。ひびが入り所々棘が生えている歪なそれは、私への残酷な宣言に他ならないと思う。

曰く、『お前を「ロス』的な。なんかそんな感じな。

だつてあのハート怖すぎる。心臓に毛が生えているとでも言外に言いたいのだろうか。トイレットペーパー（使いかけ）を顔面投球した私に怨み辛みを募らせているのだろうか。

もう、いっそばっさりやつてくれ。生殺し状態に発狂しそうだ。

冷や汗を流しながら今日も授業を受け続ける。このまま行くと登校拒否になるかもしれない。

これは虐めじゃないだろうか。学校で一番の悪に田をつけられる状態じゃなかろうか。

根暗であつても今までカツアゲや呼び出しひにはあつたことがないのが密かな自慢だったのに、何でここにきて一番に田をつけられたのか。

神様、私はひつそりと生きてきました。清く正しく美しく生きて来ただなんてあつかましいことは言いません。ですがここまで残酷な人生を突きつけられるような何かをしましたか！？

心からの問いかけは今日も今日とて返事はない。

時計を見れば授業終了まで残り一分。

番長の行為はトイレットペーパーが尽きれば終わる。そしてそれは計ったように一日の最後の授業のチャイムが鳴る瞬間なのだ。秒針を刻む時計をギンギンに睨みつけ早く進めと心から祈る。

そうして今日も、チャイムと同時にトイレットペーパーの芯が投げられ、私の一日は終了する。

不屈の精神とトイレットペーパー（前書き）

葵君視点です。

不屈の精神とトイレットペーパー

俺の名前は佐倉葵。
さくらあおい。

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたつて普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払つていただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまつた。

そんな俺も一皮剥けば普通の男子校生と何も変わらない。

普通に学校で授業を受けて、普通に学校で喧嘩をして、普通に学校に片想い相手がいる。

自分で言うのもなんだが、俺はかなり一途な性格だ。何しろ中学校から足かけ三年も同じ人に恋している。

奇跡のような偶然と根性を入れた努力のおかげで、俺の恋の相手は俺の前の席に座わつている。凛と背筋を伸ばした小さく華奢な可愛らしい少女が俺の恋の相手だ。

彼女の名前は向坂藍。
さきさかあい。

腰を超える艶やかな黒髪と、白い肌が特徴的な子ウサギのような女の子だ。その顔は体と同じで子作りに出来ており、唯一大きな瞳は長い睫毛に装飾されている。

可愛いものが好きなんて趣味はなかった俺だが、彼女を目にした三年前から密かにウサギグッズを集めている。

勿論、黒い毛に黒い瞳のウサギちゃんだ。肌の色は白いのだが、彼女の場合はその瞳と髪の印象が強すぎて黒の方がしつくつくる。別に、三年前に彼女から貰ったハンカチのワンポイントが黒ウサギで、それに影響されたとかそんなんじゃない。

ウサギ好きが高じて今ではウサギも一匹飼っている。ちなみにウサギの名前は『あいちゃん』と『あおいくん』だ。勿論番で飼っている。

///ロシップの//はとても小さく可愛らしい。『あいちゃん』の毛色は黒く、瞳の色も同じ色だ。大きな瞳で『あおいくん』よりも睫毛が長く大人しい。

対して『あおいくん』は『ホールテンオレンジの毛色』『ブリックウーンの瞳を持つ。配色も俺に似ているが、コンパクトサイズの///ロシップにしては体がでかいところも俺に似ている。ついでに『あいちゃん』激ラブで、『あいちゃん』に触ろうとすると飼い主の俺にも食いつく凶暴な性格だ。

しかしながらどれだけ盾突こつと所詮は///ウサギ。最終的に俺は『あいちゃん』を腕に抱き、『あおいくん』を見下ろして高笑いする。ウサギの癖に俺の『あいちゃん』を手玉にとらひなど百年早い。『あいちゃん』の番でなければ滅するといひだ。

ちなみに『あいちゃん』が絡まなければ俺と『あおいくん』の相性はすこぶる宜しい。『あいちゃん』よりも好奇心旺盛な『あいくん』は猫じやらしにもアタックする果敢な精神の持ち主だ。今朝も少し遊んでやつたら、その短すぎる前足でタシタシやつてきた。けれど残念にもやや鈍い『あおいくん』は、今日も結局猫じやらしをしとめられなかった。その様子を俺のベッドの上から眺めていた『あいちゃん』は、顔を上げた『あおいくん』と目が合ひと、ふい

つと顔を逸らしていた。

今のところ、俺の方が『あいちゃん』と仲がいい。まあみるだ。

話しあは逸れてしまつたが、現在の俺はそれはそれは彼女に似ているウサギに熱中している。

ウサギグッズを集めるためなら開店前の店にも並ぶし、悪友を無理やり引っ張つてフェミニンなショップにも足を踏み入れる勇気を手に入れた。

しかしながらそんな勇気を手に入れても、奥手で恥ずかしがり屋な俺は、未だに自分から彼女に声は掛けれない。

ウサギの抱き枕を抱いて眠れる俺だが、ウサギのよつに可愛らしい彼女には照れてしまつて萎縮するのだ。

そんな奥手な俺だが、先週ついに始めの一歩を踏み出した。

彼女との切欠が欲しくて毎日毎日『落し物拾つて大作戦』を決行していたのだが、地道な努力が花開いた。

手を変え品を変え角度を変えてありとあらゆるもの彼女に向かつて投げていたのだが、いつもなら落し物を拾つて手紙を巻きつけるだけだった彼女がリアクションを示してくれた。

そしてさうにあらうとか俺の顔を見て顔を紅潮させながらあの愛らしい鈴の音のような声を俺に向かつて響かせたのだ。あの瞬間、確かにキューピッドがラッパを高らかと鳴らしたのが聞こえた。

ファンファーレどころかパレードの凱旋時並の音楽隊が総出演だ。それくらい俺にとつては快挙だった。

彼女の顔が真正面から見れるのが嬉しくて、その瞳にうつるのが

幸せで、どうすればいいか判らないほどに舞い上がった。

つい、微笑んでしまうと、彼女はびくくりと体を震わせ微笑み返してくれた。

あの、向坂藍が、俺に向かつて笑ってくれた。

それからのことは覚えていないが、その日一日天国にいるかのように舞い上がっていたのだけ覚えている。何しろこんなに愛している『あいちゃん』と『あおいくん』の餌やりを忘れそうになつたらいいだ。自分で自分の浮かれ具合が怖いくらいだった。

ちなみに俺の忠実な心友の一匹は、俺ののろけを小三時間を延々と愚痴一つ言わずに聞いてくれた、友達甲斐があるいい奴らだ。人間の方は駄目だった。たつた一時間も付き合つてくれず、俺は即効で捨てられた。

まあ、それはともかく、俺としてはここから漸く俺の恋が発展するのだと思っていた。

そう、思つてたんだ。

それなのに現実は甘くない。どれくらい甘くないかというと、激から麻婆豆腐にハバネロをふんだんに投入し、さらにラー油をぶつ掛けるくらいに甘くなかった。

甘党の俺には辛すぎる辛さの現実は、受け入れがたいほどにハードだ。

鬱な気分になりながら、千切つては投げ、千切つては投げを繰り返す。ちまちまと絵を描くのに使つていて赤のサインペンも切れそうだ。心なしか俺のハートを映したその絵も歪に見える。

頑張つていてるのに、初日以来は彼女はちらりともこりりを見てくれない。理由が判らず、俺もどうすればいいか判らない。

喧嘩であれば気にせず突つ込めばいいものだが、彼女相手だとそれも出来ない。臆病な男と笑われてもいい。もう一度だけ、あの笑顔が見たかった。

最後に残つたトイレットペーパーの芯に、あの田と回じ文字を書く。

『好きです』の一言は、どうやつたら届くのだろう。切れかけたサインペンの所為で所々消えた告白は、まるで自分そのものみたいで更にずんと落ち込んだ。

顔を上げればもうすぐ授業終了だ。

どうやら、今日の求愛行動もここまでらしい。

震える手で芯を握ると、想いをこめて彼女に投げた。

トイレットペーパーは呪詛の種

私の名前は向坂藍。

至つて一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校二年生である。

後ろの席の悪魔・・・もとい、番長が私にトイレットペーパーを投げ始めてから早十日目。

今日も今日とて奴は後頭部狙いでぼこぼこ投げ続けている。

もしかして彼は私の毛根を根絶やしにしようと企んでいるのだろうか。

量が少なくもないが多いわけでもない頭の真ん中に、しかも律儀にほとんど同じ場所に投げ続ける彼は、私を昔日本に来て宗教を広めようとした、かの有名なカツバヘアの人と同じ髪型にしようとしているだのろうか。

つい十日前までは化学の教師のスダレた頭を見て『命髪毛』と読んでいた私はもうここに居ない。

それだけにあの薄い命を大事にしている彼に教えてあげたい。

後頭部に刺激をやれば髪増えるって言うのは嘘ですよ、と。

事実私は彼の攻撃を受け始めてからシャンプーするたびに十本単位で髪が抜けてる。

同士として、あのスダレにワックス塗りたくつている先生に教えてあげたい。

今私は毛根大事に、髪の毛大事にの気持ちが徐々に芽生えている。

志だけ平和主義者の偉人であつても、髪型はふつさりもつさりが

いいのだ。

「の髪がなくなれば、さりげなく俯いて授業中に寝るときじつすればいい。

否、そもそも後頭部に刺激を「えられ続け、どうじょうもない悪意を背後から浴びせられ続ければ眠る余裕は無いが、スキンヘッヂにするには私は勇気が足りなすぎる。

一瞬想像したがやはりない。無理無理無理、絶対にない。

あんなのは綺麗な女人がやるから赦されるのだ。私程度では絶対に駄目だ。

そう言えば後ろの席の番長もスキンヘッヂ一步手前の髪型をしていた気がする。

あまりまじまじと見たことはないが、触つたりじょりじょりとした感じだった。

一生触る機会もないだろうし触りたいとも思えないが、綺麗な頭の形をしていそうだった。

もしかして、番長は私の髪の毛に嫉妬してこんな行為を繰り返しているんだろうか。

それならいつそ切つてしまおうか。

スキンヘッヂか宣教師ヘアになる前に、妬みの元であるこの髪を切つてしまおうか。

指先で黒髪を一房摘むと、そつと眺める。

艶やかでキューティクル満載のこの黒髪は、私の自慢できる唯一のものだったが、これの所為で毎日呪詛を掛けられるならもう切つてしまつて構わない。

髪を切つてついでここでの呪いの行為も止めさせたい。

つらつらと考えていると、気の抜けたチャイムが鳴り響く。

昼休みの合図だ。現在の学校生活でHRの終わりと回じくらーに待ち望んでいるが、この時間は同時に苦痛の始まりだ。

友達の居ない私には一緒にじこ飯を食べよう誘ってくれる人は居ない。

これまではずっと教室でじこ飯を食べていたのだが、番長にトイレストペーパーを投げた翌日から私はここで食事する勇気は失った。

かといって弁当を持って教室を出ても、後ろに憑いているのだ。誰つて、勿論番長が。

始めは気のせいかと思い学校中を歩き回つたが、生まれたばかりのカルガモか！？と突つ込みたくなる勢いで付いて来る。

しかもトイレットペーパー持参で。

歩き回つた末に得た安息の地は女子トイレ。勿論そんな場所でご飯を食べれるほど図太くない私は、五分ほどして番長も居なくなつただろうとそこから出た。

しかし私の考えは限りなく甘かつた。

何を考えているのか、それとも何も考えて居ないのか。

トイレットペーパー片手にトイレに足を向ける生徒全員にガン垂れつつ、番長はそこに立つていた。

そう、女子トイレの入り口付近に、まるで「王のようす」堂々と。

年頃の男子生徒としてどうなんだ、それ？と思つが、そんなこと勿論口に出せるわけがない。

口に出せるならどうの昔こゝいい加減にしろよ、この腐れ野郎！
女舐めんなー根暗舐めんなーお前の口内使用済みのトイレットペー

パーで埋め尽くしてやろうか！？』程度のことは言っている。

トイレから出た瞬間に見つけた彼からなるべく視線を逸らし、点々と続くトイレットペーパーを眺めながら教室へと戻ったのはもうトラウマに近い。

おかげで私は学校のトイレに行けなくなってしまった。

仕方がないので教室で俯いていたが、お腹も空いたし精神面でも色々とギリギリだ。

誰かこの空気を壊してください。

神様本当にお願ひです。

誰でもいいんです。

汝の隣人を愛せよと仰つたあなたですが、私の隣人はこの窮地を見てみぬフリです。

どうか勇者を降臨させてください。

「ちわーっす！佐倉先輩居ますかー？」

どうやら私の願いは届いたらしい。

ただし現れた奴は空気を壊すが空気も読まない後輩だった。

ざわめいていた教室が一気に静かになる。

へらへらと笑っている目に眩しい金色の髪をした彼は、私ですら知っている有名人だ。

この学校で唯一の金髪の彼は、一つ年下の小倉桂一^{おぐらけいいち}。

垂れ目で肩を越す髪を一本に結わえた彼は、何処か犬のような雰囲気を持つ愛嬌のある人物だった。

そしてありえないことに番長を先輩として尊敬している。

入学当日に番長に喧嘩を売つて返り討ちにされたことで彼を目標にしているらしいが、私としてはすぐにでも人生の補正をした方が良いと思う。

しかし人見知りがなくその愛嬌から男女共に人気があるらしい彼だが、所詮は番長と同類だ。

喧嘩上等、掛かつて来いやと嗤うタイプだ。

実際に私も一度目にしたことがあるが、あれは凄絶だった。

普段はにこやかな様子で友人達の中心に居るくせに、眇めた瞳には狂氣が宿り唇から覗いた犬歯は恐ろしさしか感じなかつた。

見つかる前にダッシュで逃げたが、あの時の背筋が凍る感じは忘れない。番長を見たとき以来の衝撃だつた。

へラへラしながら上級生の教室に物怖じすることなく踏み込んだ彼は、番長を見つけると嬉しそうに駆け寄る。

前門から来る虎に、後門で牙を剥き威嚇している狼。

思わず俯くと、学年ごとに違う室内履きが視線の先で止まつた。何故か嫌な予感に顔を上げられないで居ると、髪に何かが触れるのが視界に映る。

思わず顔を上げてしまい、瞬時に後悔した。

「あれー?」の人、向坂先輩つすよね? 佐倉先輩、同じクラスだつたんすか?」

「ツ」

思わず息を飲み込む。

まさか学校有数の有名人に名を知られているとは思っておらず、是非ともお近づきになりたくない彼が文字通り近づいている状況に冷や汗が流れる。

何故彼は自分の名を知っているのか。

もしかして以前喧嘩しているのを見ていたのを知りていたのだろうか。

だとするとこれは何？お礼参りか何がだろうか？

しかし自分は一般小市民
彼にお祝参りされるよ」な何かにして
いない。

ただただ恐怖で身を強張らせじつと行動を眺めていれば、驚いた
ように瞳を丸めた彼は、ほにやりと何とも緊張感のない笑顔を浮か
べた。

その笑顔に一気に体の力が抜け、一体なんだと唖然としていると、

彼の指が髪から離れる。

近づく姿にどうするつもりかと再び身を縮め
瞬間本当に息が止まつた。

「…?…?…?…?」

ドンガラガツシャンガシャシャー的な音を立て、吹つ飛んだ人間

を呆然と眺める。

人間が吹ふ飛ぶ姿など、テレビのお笑い芸人以外で始めて見た。
そして一生見たくなかった。

吹っ飛んだ張本人は床に転がりながら腹を抑えて上半身を起こして
いる。

痛みを訴えているが、吹っ飛んだにしては余裕がある姿に瞬きを繰り返していると、ぽん、と頭に何かが触れた。

何だと驚き顔を上げると、睨み殺すぞとばかりに瞳を鋭くした三白眼。

今にもビームが出るんじゃないのかと思えるほどの迫力を有した彼は、今度は先ほどの彼が触れたように私の髪に触ると、そのまま指を離した。

何がしたいんだと蛇に睨まれた蛙状態で固まっていると、頭の上からヒラリと何かが落ちてくる。

空中でそれをキャッチし、無言で去っていく番長を見詰めた。不満を訴える後輩の襟首を手で引っ掛けると、有無を言わさずに番長は彼を引き摺っていく。

呆然としながらそれを見送り、番長が居なくなつたところで私は握つた何かに視線を落とした。

「…………」

ミシン田一つで区切られたトイレットペーパーに描かれていたのは随分と劇画調なリアルウサギ。

そしてそのウサギの心臓部にはでかでかとハートが描かれ、さらに入れをリアルな矢が突き刺し血が流れていた。

それを見た瞬間、私は生まれて初めて気絶するという体験をした。

保健室で残りの時間を過ごした私は後頭部にトイレットペーパーの襲撃は受けなかつたが、目覚めた瞬間に最初に目にしたのは劇画

調のウサギだつた。

私はその内本当に呪い殺されるかもしねりない。

トイレットペーパーにウサギちゃん（前書き）

葵君視点です。

トイレットペーパーにウサギちゃん

俺の名前は佐倉葵。
さくらあおい。

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたつて普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払つていただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまつた。

そんな俺は現在片想い継続中の奥手な男もある。誰だつて甘酸っぱい恋の一度や二度は経験したことがあるだろう。

運と努力の末に俺が手に入れた地位は、初恋の相手の後ろの席。中学一年生で初めての恋は遅いのかもしれないが、俺にとつては唯一で特別な恋だ。

瞼を閉じれば今でも色褪せない思い出が浮かぶ。

喧嘩で傷ついた俺に差し出された穢れない白のハンカチ。ウサギのワンポイントも愛らしいそれは、今でも俺の宝物だ。

俺の初恋の相手、向坂藍は、学校でも有数の美少女だ。悪友が調べた結果では、密かに行われる男子間での美少女投票でベスト3から転落したことはないらしい。

好みはあるだろうが、華奢で色白な彼女は庇護欲をそそるタイプの凛とした美しさを持つ美少女だ。俺にとつては、不動の一位である彼女に似合う花は桜。桃色の花弁が風に舞う中、靡く髪を耳にかける仕草が思い浮かぶ和風美人なのだ。

容姿も美しいが、中身も凄いのが向坂藍だ。

試験をすれば学年一位。運動をすればスポーツ抜群。料理も裁縫も隙はなく、選択科目の音楽だって涼やかな歌声が美しい。

ちなみに俺の選択は美術だが、美術室の隣に音楽室があり、音楽に特に気合が入っていない学校の緩々の音楽設備のおかげで雲雀のような美声が届いてくる。雑音の中穢れなき歌声を響かせる彼女を俺が間違はずもない。

そんな万能な彼女であれば、勿論ライバルの数だって数え切れないほど多い。

物静かで一人でいるのを好んでいる彼女に声をかける男は居ないが、一組の遠藤や三組の佐々岡、さらに三年の山崎や一年の岡部など、学校でも有数のイケメンが彼女を狙っていると悪友から聞いた。無駄に情報網の広い彼からの信頼度の高い情報に、俺の胸が嫌な感じに響いたのは記憶に新しい出来事だ。

どいつもこいつも喧嘩しか特技がない俺とは違い、勉強が出来たり運動が得意だったりピアノが得意だったりと特技がある男たちだ。無駄に秀でた部分があるくせに、さらに天賦の才を得るなど嫉ましくて仕方ない。

しかし残念ながらどれだけ想いを寄せようとも、彼女が振り返ることはない。声を掛けてもあの静かな眼差しで見詰められ撃沈する様を見たが、何とも胸がすく想いだた。ざまあみろ。

俺と違うクラスも離れた奴らはアピールする時間もなければ、相手にすらされて居ない。

ちなみに俺はその部分だけ一步リードだ。

席が前後していることもあり、今日も『落し物拾つて大作戦』を決行している。奴らと違い毎日のアピールに予断はない。

しかしながら初日のアピールは成功したのに、それ以降は成果が

落ちているのだけが気に掛かる部分もある。

最近は顔色も芳しくないし、とても心配だ。

先日は弁当箱を持つてどこかに移動しようとした彼女の顔色の悪さについ後ろをついて行つてしまつたが、顔色の悪さが心配でも今は勇気が出せない俺は自分から声が掛けられなかつた。

なので彼女から声を掛けてもらおうと、後ろからトイレットペーパーを投げ続けたのだが、体調が悪化したのか彼女はトイレに入つてしまつた。

流石に女子トイレの中までついて行くのはできず、かと言つてそのまま放つておくのも心配で入り口で待つていたのだが、暫くして出てきた彼女の顔色は蒼白に近かつた。

心配で思わずガン見してしまつたが、彼女はすぐに俯いて移動を始めたので、また後頭部狙いにトイレットペーパーを投げ続けた。

しかし結局彼女はそのまま教室へ戻ると、弁当も食べずに自分の席で腰掛けて俯いたままだつた。

俺も心配で心配で胸がはちきれそうになり、結局ご飯を食べれなかつた。

その日から昼の時間もずっと教室にいるのだが、彼女が弁当に手を付けた痕跡はなく、徐々に瘦せていく姿に俺の心も削られしていく。心配で心配で仕方ないのに、トイレットペーパーを投げることでしか自分のアピールが出来ない不甲斐ない俺はなんて情けない男なのだろう。

本気の恋がこんなに怖いものなんて知らなかつた。遊びなら簡単で肌を合わせるのだつて欲望の放出にしかならないのに、この小さな彼女に俺は心底怯えている。

やつれしていく彼女に心痛を堪えながら俺は考えた。どうすれば彼女を元気付けられるか考えて考えて考えて、ついに一つ方法を思いついた。

後頭部にトイレットペーパーをぶつけ続けてこすらを向いてくれるのを待つのではなく、さり気無い仕草で想いを託す方法。投げ続けたトイレットペーパーをミシン目一つのところで丁寧に千切る。

そして持つている黒のサインペンと、赤のサインペンを取り出した。

最近気がついたのだが、もしかしたらサインペンはトイレットペーパーに何か描くのに向いていないかもしない。滲む先を利用して絵を描きながら唐突に思う。

しかしながら今手持ちの色ペンはこれしかないので、カリカリカリと手を動かした。

途中で化学の担当のスダレ禿と目が合つたが、物言いたげな様子を一睨みで黙らせる。

化学の授業より恋愛だ。恋こそが青春の醍醐味で学生の本分。昔の偉人だつて言つている。『せつなる恋の心は尊きこと神のごとし』と。

つまり今の俺の想いほど尊く高潔なものはないのであり、他に優先すべき何かなど存在しない。

何か言いたげに口を開いたスダレ禿にさらに眼光を鋭くすれば、諦めたように首を振つた。

勝つた、と心中で快晴を叫びつつ手を動かす。

実は俺は絵を描くのが得意だ。デフォルメされたキャラクターやイラストは苦手だが、写実などは得意だ。見たままを描くのは楽しく、それ故に選択だけは彼女と違う授業を取つていてる。

ちなみに今トイレットペーパーに描いているのは「ローラップ」の我が家の大天使の『あいちゃん』だ。

俺が言つのもなんだが、うちの子は毛並みもいいし睫毛も長いし耳の垂れ具合も最高だし、もうモツフモフのラブリーさんだ。勢い余つて全力で抱きしめたくなる愛らしさで、胸のときめきは留まるところを知らない。つまり、絶世の美人さんだ。

彼女を見て心和まない存在など世界に居るはずがない。向坂藍と同じくらいに魅力的なミニローラップなのだ、『あいちゃん』は。

本当は番の『あおいくん』も描いてやりたいが、生憎色ペンが足りない。似た色を購入することを胸に決めつつさかと手を動かす。

ああ、そうだ。俺の想いを表現するためにも少しプラスしよう。『あいちゃん』の姿に心が和み、ついでに俺の想いも表現できる。

一石二鳥のアイデアに俺の心は一気に浮き立つ。

描く途中の『あいちゃん』の胸の部分に赤いペンでハートを描き、そこに黒ペンで矢を通す。まさしく俺の心そのものだ。

貴女に心を射抜かれてます的な。我ながら凄い表現力の絵に領く。そうだ血も流してみよう。貴女に心を射抜かれ、振り向いてもられない俺は心から血の涙を流しています的な。

いいアイデアだと納得し、絵の続きを描く。

これなら奥手の俺でも表現できると絵に夢中になつていると、不意に名を呼ばれた気がした。

教室が静かになり顔を上げて周りを一瞥すれば、教室の入り口に見慣れた後輩の姿があつた。

「ちわーつす！佐倉先輩居ますかー？」

騒々しい声にひつそりと眉根を寄せる。

俺は目立つのは嫌いだ。それなのに俺の苛立ちを理解できない後輩は、俺を見つけるとへりりと笑つた。

彼の名は小倉桂一おぐらけいいち。一つ下の一年生だ。

一年生にしてはでか過ぎる態度で余裕たっぷりに上級生の教室に足を踏み入れた小倉は、垂れ目と学校で唯一の肩を超える金髪を軽く結わえた姿が特徴的な男だ。

顔立ちは整い、身長も190越えをする俺より少し低い程度なので長身の部類に入る。瘦身だが鍛えているので十分な筋肉が体についており、犬のようになつっこいそうな雰囲気を持つがひとつ繩筋じや行かない奴もある。

へラへラした態度で男女共に人気があるが、あいはその笑顔のまま遠慮なく人をぶん殴るタイプだ。

入学式当日に俺に喧嘩を売つてきたので思い切り叩き潰してやつたが、俺以外の奴らには全勝したらしい。

入学式から三週間後、『いつかあんたを越えてみせるつす』と、一見すると人当たりのいい笑顔で宣言し、付きまとつてくる面倒な奴だった。

喰えない笑顔のまま俺に一直線に向かつて来た奴は、不意に足を止めると目を丸くする。

そしてへりり、と氣の抜ける笑顔を浮かべると、着崩した制服のズボンに手を突つ込み上半身を屈めた。

彼の視線の先には、無言で俯く向坂藍。

好奇心一杯とばかりに目を輝かせた小倉は、何の気負いもなく彼女に手を伸ばすと、その黒く艶やかな髪を一房摘んだ。

さういひと音がしそうなくらい美しい黒髪が流れ、暫し見惚れる。

「あれー?」この人、向坂先輩つすよね?佐倉先輩、同じクラスだつたんすか?」

無邪気に聞こえるが、その瞳は獲物を見つけた肉食獣のような色を宿していた。

指先で摘んでいた髪を開放し、くしゃりと笑み崩れる。無邪気にも見える様子に、俺の眉間に一気に皺が刻まれた。

ゆるく口角を持ち上げ、目の前の彼女を見定めるよう顔を近づける。

我慢できたのは、そこまでだった。

「ツ

俺が立ち上がったのを視界の端で捕らえると、一瞬だけ小倉の顔色が変わる。

だが今更遅い。すでに間合いは俺のもので、振り上げた拳は彼の鳩尾に吸い込まれるよう打撃衝撃を和らげるためにバックステップを踏んだのだと気付き、少し先で机を薙ぎ倒しながら床に転んだ男を睨み据えた。

腹を押さえ立ち上がれずにいるのを確認してから、動きを止めた彼女に視線をやる。

可哀想に余程怖かったのだろう。

血の気の失せた顔で唇を強張らせている彼女に、無意識に手が伸びた。

初めて触れる彼女の頭は片手で握れるほどに小さくて、黒い髪は『あいちゃん』のものよりも真つ直ぐでさらさらした感触を伝えてきた。

初めて触れた彼女に心臓が爆発するのではないかと思えるくらいに胸が高鳴る。

今なら氣絶してしまえそうだと、震える吐息をゆっくりと吐き出した。

それだけでも死んでしまいそうなくらいだったのに、弾かれるよう顔を上げた彼女は真っ直ぐに俺を見てきた。

僅かに潤んだ瞳に心が痛み、その涙を拭えたなら、と指先が伸びそうになる。

けれど、びくり、と体が震えたのを見て、代わりに小倉が触れた部分を消毒とばかりに摘んだ。

まだまだ触れたいと望む自分をやつとの思いで宥め、もう一度だけ頭に手をやると先ほど描いていたウサギの絵を置く。

『あいちゃん』の姿を見て、彼女が少しでも心慰められれば良いと、勇気付けるよう微笑んだ。

流石に俺の想いが赤裸々に描かれているそれを見たときの反応は直接見るには恥ずかしそぎ、すぐさま視線を逸らし上半身を起こした小倉に向ける。

「・・・来い」

「へ?」

きょとん、と顔を上げた小倉の首根っこを掴み強制的に引き摺つていいく。

そのまま廊下に出て、人通りが無い場所まで行くと壁際に向かいぶん投げた。

背中を強かに打ちつけたらしい小倉は、息を詰めてこちらを見上げる。

愛嬌がある瞳に涙を溜めた男に、俺は強いて教えてやつた。

「言つておくれが、彼女はロングも金髪も好みじゃない
はあ？」

「中学のとき、確かに聞いた。彼女の好みは明るすぎない茶色だ」

正確に言つと、現在の俺のよつな栗色の髪だ。

中学のときのインタビューで学校新聞に載つていた。

胸を張つて教えてやると、ぽかんと口を開けて間抜けな表情を晒した小倉は、茶色の瞳でじつと俺を見た。

「・・・先輩、向坂先輩に惚れでんすか？」

「・・・!?!？」

秘めた恋心を見抜かれた俺は、目をまん丸に見開いて鋭すぎる洞察力の後輩に言葉も発せなかつた。

そして彼女の元に届けた絵を思い出し、奥歯を咬んで表に出そな感情をギリギリで堪えた。

呪いのトイレットペーパーの終着地点

私の名前は向坂藍。

至つて一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校一年生である。

私は今人生の岐路に立っている。

昨日人生で初氣絶してからずつと悩みに悩んで今尚悩みながらも決心をしようとしていた。

私の後頭部にトイレットペーパーの襲撃が始まつてから早11日目。もう色々と限界だ。

毛根も限界だし精神的にも限界だ。昨日ついにシャンプーしているときに抜け落ちた毛が20の大台に乗つた。

このままだと本当に宣教師ヘアになつてしまつ。それは嫌だ。

私をここまで悩ませ追い詰めている存在は、今日も私の後ろでぽこぽことトイレットペーパーを投げ続けている。

後ろを振り返るな、振り返つてはいけない。

歯を食いしばり冷や汗を流しながら私がここまで我慢するのは、彼が学校でも超有名人で関わりたくない人間ベスト3に入る人種だからだ。

彼の名前は佐倉葵。

今時珍しいバンカラが似合いそうな番長様である。

スキンヘッドすれすれまで刈り取られた髪の毛に、耳にじやらじやらと付いたピアス。ひと睨みで熊も引付を起こすんじゃないかと

思えるくらいの迫力を有する、とても同級生とは思えない少年だ。

ちなみに身長は190を超えていて、小柄な私からすれば見上げるほどの大男。

彼の一の腕が私の太ももと同じくらいの太さといえば、その体格の違いも察してもらえるだろ？

とにかく何を『乱心』していらっしゃるのか知らないが、番長の奇行は11日目に入つても終わらない。

クラス替えしてから一月。友達は一人もいなくとも、平和に暮らしていたあの日々が懐かしい。

思い返せば涙が零れそうだ。歯を食いしばり我慢しながら、自分の人生そのものを振り返つてしまつ。

思えば友達と呼べる人間は数えるほども存在しないが、それなりに生きてきた。もしかすると今が一番私の短い人生で過酷な時期なのかもしれない。

ため息を零して俯けば、視界に恐ろしいものが目に入る。

それは昨日番長に頭に乗せられた、どうみても呪符。

リアルな黒ウサギの心臓に矢が突き刺さり、そこから血が滴るという何ともホラーな劇画調な絵だ。

家に帰つて捨ててやろうと思ったが、呪われそうで出来なかつた。家族に相談しようにも、こんな絵を見せたら心配されると思い至り、部屋で徹夜してしまつた。だつて普通寝れないでしょ、こんな呪いのブツが置いてある部屋で。

瞼を閉じるとこの絵が脳裏に浮かび飛び起きたこと十数回。しかも想像の中でウサギは痛みに呻き声をあげ涙を零している。恐ろしさ増大だ。

枕元に置いたのがいけないと場所を机の上に移動させたが、妙に緊張して目が冴えたまま朝が来た。おかげで目がしばしばする。このままでは本当に冗談じゃなく登校拒否になる。

そこで起死回生の案を私は練つた。

そう、人生で一番関わりたくない相手に頭を下げることを決意したのだ。

自分で言うのもなんだが私はここ10日超我慢したと思つ。自分のキャラクターを忘れるくらいに我慢したと思うのだ。

しかし我慢にも限度がある。

秤にかけた結果、もう背に腹は変えられないと頭の中に住むもう一人の自分が宣言したのだ。

この10日間トイレットペーパーを後頭部に投げ続けられた私は、その法則性に気付いた。

番長がトイレットペーパーを投げる頻度は統計すると一時間目と三時間目、そして六時間目に多い。

対してその手が緩むのは昼放課に入る寸前と朝と帰りのH.R.。よつてその魔の手から抜け出し『奴』と接触するのは、『奴』の行動を省みても昼が適切だ。

そう判断した私はぼこぼこ投げられるトイレットペーパーに拳を震わせながらも、何とか四時間目まで耐え抜いた。

そしてチャイムがなった瞬間、教師への挨拶などお山の何処かへ飛んで行けとばかりにスタートダッシュをきつた。

上下する肩を宥めて、緊張に震える手を握り締める。

私が現在立っている場所は、生徒会室の前。つまり学校で一番権力を握る生徒（もしかしたら違うかもしない）の集う場所の前にいた。

私は今から人生でもベスト3に入る苦手な相手へと接触を図ろうとしている。

深呼吸を数度繰り返し、震える手をドアへと伸ばした。

ノックを数回すると、室内から返事が返る。

ここでどうして返事が来るかは疑問に感じてはいけない。この学校での生徒会役員は普通より少し幅を利かせていて、彼らは特権を幾つか持っている。

授業の参加資格もそれの一つで、だから授業が終わつたと同時にダッシュした私よりも先に と言つよりも予めここに居たのだ。

何故学校に友達も居ない私がそんなことを知つているかというと、去年生徒会の勧誘を受けたからだ。

なんだかんだ言つて重労働な生徒会は、甘いエサをちらつかせて役員をゲットする。私が勧誘を受けた理由は成績が第一なのだろうが、役員は割と学校で名の知られた生徒が多いらしい。

去年私を勧誘してきたのは当時の生徒会長だったが、今では代替わりしている。その代替わりした役員こそが私が生徒会役員を断つた最大の理由だが、なけなしの勇気を振り絞り私はここまでやつてきた。

怯える心を叱咤してドアを開ければ、12畳ほどの広さの部屋に長方形の机が口の字型に並んでいる。室内に居たのは3人。誰も彼も一応名前だけ知つていて有名人だ。

そしてその中でも一際目立つ窓際のお誕生日席に座る男こそ、私

が用がある人物だつた。

ベリー・ショートの黒髪にきりりと釣りあがつた柳眉にアー・モンド形の瞳。豹を思い起させれる雰囲気の持ち主の彼は名を乙杜恭弥おとむりきょうやといい、信じたくないが私と血縁関係がある生徒会長だつた。

血縁関係といつても父親の妹の従兄弟の息子といつだけでそこまで近いわけではないが、母親同士が仲が良いため昔はちょくちょく顔をあわせていた。

顔立ちは私と違つた勝気な顔立ちの美形で、お祭り人間でもある所為かそこそこ人気はある。

しかし、だ。

はつきり言おう。私は奴が苦手だ。

私が根暗になつた根本を形成したのは奴だ。

幼稚園時代、私は奴と一緒にどちらかの親に預けられることが多かつた。その当時は流石に友人も数人いたし、仲良く遊んでいることもあつた。

それなのに、我が家に友達を呼んで一緒に遊ぼうと誘うと、何が嫌なのか大魔神の如く立ち塞がり、友達と一緒に遊んでいた大作の積み木の城をめつたために壊された。

さらに奴の家に行つた時も、奴が友達を呼んだと紹介したから仲良くしようとなれば、『おまえはこっちにくな、ブス!!』と髪を引っ張られぼろくそにいびられた。

そんなことが続く内に一人きりで過ごすことが増えたが、それはそれで無理だつた。

近づくたびに『おれによるな、ばかあ！』。離れれば『なにむしてんだよ、ばかあ！』。一人で遊んでいるのを邪魔しないよう隣に座れば『なにみてんだよ、ばかあ！』。じゃあと隣に座りながら本を読み出すと、『なにおれからめをはなしてんだよ、ばかあ！』。

幼心に馬鹿はお前だと思った日を今でも簡単に思い出せる。

学区こそ違うが家が近かつたので、何だかんだでお互いの家を行き来する生活は小学校を卒業するまで続いた。

中学に入れば奴が部活動に入ってくれ、その機会は正月や盆などの身内が集まる場だけに変わり、私は心底ホッとしたものだ。

そして高校に入り顔をあわせて絶望した。何故、奴の志望校を確認しておかなかつたのだろうと。

私は奴の母親に聞かれて素直に志望校を答えていたのだが、まさか同じ高校に入ると思っていなかつた。サッカーを得意とする彼は当然サッカーの特待で県外にでも行くと思い込んでいたのだ。

それでもスポーツはともかく成績は普通の彼は、文系といつこともあり顔はほとんど合わさない。去年も運良く1組と5組とクラスが離れほとんど会話もなかつた。

最後に会話したのは、去年の正月だ。生徒会の役員になるかどうかを問われ、その気はないと断言した。

覚えている面影とほとんど変わぬ奴は、私の姿に目を丸めると、にいと口角を持ち上げる。

性質の悪い笑い方は覚えている頃のままで、自らの選択に迷いが生まれる。

しかしポケットに入っているあの呪いのトイレットペーパーが私の脳裏から逃げることを拒否させた。

「何だ、藍。お前が俺に会いに来るなんて珍しいじゃねえか」「・・・乙杜、向坂さんと知り合いなのか？」

「幼馴染だ、一応な。遠い親戚でもある」

「お前が？向坂さんと？全然似てないし」

「あいつは母親似。俺は父親似。んで？俺を毛嫌いしてお前が俺に何の用だ？」

眇められた視線に身が竦む。

九年間に渡り苛められた記憶は性格を歪めるほどで、苦手意識は失っていない。

それでも背に腹は代えられない。トイレットペーパーの呪いは、もう嫌なのだ。

「生徒会の、会計のポストはまだ空いている？」

「・・・何？お前、まさか」

「空いているのなら・・・私を、生徒会に入れてください」

一息に告げ、深々と頭を下げた。

会計の役割は計算が得意な私へと去年の生徒会長が持ちかけたポストだ。しかしメンバーを聞いた私は、会長候補が恭弥だと知り拒絶した。

生徒会の入れ替わりは去年の10月。そして普通なら変更も今年の10月だ。役員の追加も基本はなく、一年間を同じ役員が勤める。そしてうちの学校は生徒会は会長が選ばれれば、基本的に残りの役員は会長の指名制になる。私が会計のポストを断つたのは、本来なら役員を選ぶはずの恭弥の指名ではなかったから、というのも理由の一つだった。

しかし今はむしろ頭を下げてでも入れてもらいたい。都合が良いと判つているが、それでも私も他に道がないのだ。

「お前が、俺の生徒会に入るのか？」
「・・・お願ひ、します」
「本氣か？」
「本氣」

しつこい問いかけに顔を上げれば、アーモンド形の目を見開いてこちらを見詰める恭弥が居た。

真つ直ぐな視線にたじろぎながら頷くと、ぱつと顔を輝かせる。しかしそうにその笑顔を隠し、これ以上ないくらいに眉間に皺を寄せた。

私へ向けていた視線を逸らすと、腕を組み胸を逸らす。

「一応、まだ会計は空いてる」
「本当!?」
「お前が、どうしてもって言つなら、入れてやつてもいいぞ。いいか、どうしても!って言つならだぞ!」
「どうしても」
「・・・なら、仕方ねえな!どうしてもって言つなら、入れてやらないこともない。幼馴染だし、特別だ!」

つんと顎を逸らした恭弥が初めていい奴に見えた。
トイレットペーパー地獄から開放されると思えば、あのいつ殺ら

れるかと、こう恐怖を思えば、子供じみた恭弥の嫌がらせくらい耐え切つて見せよう。

奴だつて一応高校生だ。まさか小学生並の嫌がらせはしないはず。

ポケットに手をやり、リアルウサギの描かれたトイレットペーパーを握る。

捨てるのはまだ怖いのでもう心に決め、漸く出来た逃げ道に脱力して座り込みそうだった。

「何だ、あの乙杜のシンナー具合」

「・・・向坂に関しては昔からああなんだ。察してやつてくれ」「てか、察する以前の感じだけな」

そんな会話がさりげなく繰り広げられていたことなど、私はまだ知らなかつた。

トイレットペーパーは恋の架け橋・前編（前書き）

葵君視点です。長くなつたので分けました。

トイレットペーパーは恋の架け橋：前編

俺の名前は佐倉葵。
さくらあおい。

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたつて普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払つていただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまつた。

そんな俺も現在は花の高校ライフを満喫している。その昔隠れオタクな悪友に押し付けられた少女マンガの登場人物のように、俺の背景には満開の花が咲き誇つている。
勿論比喩表現だが、それが大袈裟ではないほど感情面において充実した生活を送つていた。

ときめきの高校生活、なんて彼女と出会う前の自分が聞いたら鼻で笑うだろうが、今の俺は恋の神様限定で信じている。
無神論者の俺に神様の存在を認めさせる切欠になつた存在の名は、
さきさがい。
向坂藍。

今日も極上の絹糸のような黒髪を背中に流し、真っ直ぐに背筋を伸ばす姿は、小柄な身長であるが凛として美しい。

前後する席のおかげで顔は見えないが、どうせ隣になつても緊張して顔を覗き込むなど出来ない。

小心者の俺には背筋が伸びた姿を後ろから思つ存分窺える背後の席がピッタリだ。

一日中でも見ていていい。むしろ一年中でも一生涯でもいい。
机に頬杖を付いて考えるのは目の前の彼女の存在だけで、授業する

教師の声など右から左へ抜けていく。

特進クラスで居るために最低限の勉強を欠かすつもりはないが、それは家ですればいい。

学校は学生生活を満喫する場だ。すなわち恋愛を優先すべきだ。それこそが自分の青春。まさしく人生の熟す前の青い果実を満喫している。

だが心の花が満開だったのはつい先日まで。

今の俺の心は、薔薇が七分咲き程度の勢威しかない。彼女へのアピールを始めてから11日。俺には日が経つにつれ少しずつ心の闇が生まれてきた。

ポコン、ポコンと彼女の後頭部狙いでトイレットペーパーを投げながら首を傾げる。

黒髪に覆われていない肩が、痩せた気がした。

元々出るところは出ているのに華奢で細い印象の彼女だが、最近になつて益々痩せた。

毎日昼も食べずにずっと俯いていたが、やはり病氣にでもなつてしまつたのだろうか。

心配で仕方なくて俺も昼は食べれないが、夜をきつちり摂つていて所為か俺は太つた。

最近喧嘩を売られることも少なくなり運動していいお陰だろうが、大柄な俺は体を維持するためにも食欲旺盛だ。燃費がいいのか悪いのか判らないと言われる俺の食欲を少しでも分ければいいのに。

それにしてもこれ以上体重が増えるよつならシェイプアップしなければならない。

油断ならない後輩の小倉でも誘つて軽く汗でも流さねば、太り過ぎだと彼女に嫌われてしまう。

切ない想いに胸を焦がしつつトイレットペーパーを後頭部に投げ続

ける。

昨日『あいちやん』の絵を描いてから思い立つて購入した色ペン。だが十色ペンで綴つた想いは今日も報われずに床へと落ちていく。そう言えば一度も片付けたことがないのであれば、翌日になると消えているトイレットペーパー郡は何処に行っているのだろう。僅かばかりの疑問が脳裏を過ぎり、それどころではないと首を振る。今は徐々に瘦せていつて向坂藍についての心配が先だ。

まさか、と思うが彼女の食欲が減退した理由は俺と同じなのだろうか。

クールで冷静な彼女の姿から考えてもいなかつたが、もし、自分と同じように恋煩いでご飯も喉を通らないのだとすれば、俺はいったいどうすればいいのだろう。

全く考えていなかつた想像に、今の時点では推測でしかないのに泣きそうになる。

その姿と何処から見てもパーフェクトな存在故に彼女に想い焦がれる男が多数存在するのは知っていたが、彼女が誰かを好きになるなんて考えたこともなかつた。

皐月の風のように涼やかで爽やかな空気の彼女は、まるで純白の雪のよう踏みにじられない穢れないもので、それが別の色に染まるなど想像もしてなかつたのに。

込み上げる感情を奥歯を食いしばることでぐつと堪える。まだ希望は捨ててはいけない。そう、まだ希望は残つている。

何故なら俺は朝見かけたのだ。彼女の机の端に、昨日手渡した『あいちやん』の絵が置かれているのを。

机に辛うじて乗つてゐるそれを見た瞬間、ぐあつと赤くなりそうな顔を気合で押し込めた俺は凄いと思う。本気で頑張つた。喧嘩で骨を折つたときなどと比べ物にならない気力が必要だつたが、頑張つたので僅かに口元が引きつつただけだ。

まさか赤裸々の想いを机に飾られるとは考へてもなかつたのであれど、怒るという選択肢もなく、むしろ学校までずっと手放さず持つつていてくれたのだと嬉しい。

いきなり感情を押し付けられ、最悪捨てられるかもしれないと思つていたのだ。

そこまで回想し、俺ははつとした。

まさか、向坂藍が考へてゐるのは俺のことだらうか。
最近徐々に瘦せていつてゐるのは、彼女が俺を想つてご飯も喉を通りないとか、そんな理由なのだらうか。

果てしなく自分に都合がいい妄想だが、もしそうなればと歓喜が胸の奥から競りあがる。

あまりと言えばあまりの興奮にトイレットペーパーのコントロールを誤り、向坂藍の斜め前方の男に当たつた。

突然のことの大袈裟に体を震わせた男は後頭部を抑えきよろきよろと視線を彷徨わせ、机の上のトイレットペーパーに動きを止める。
そつと手に取り恐る恐る振り返つてきたので、全力で睨みを利かせた。

それは貴様に向けた想いじやねえんだよ。むしろ触れるだけで万死に値するんだよ。

てか俺の全力の恋心を素手で鷲掴みつて何様だ、コルあ。

俺の持つ感情の中で唯一純粹な部分を汚い手で握るつてどんな了見だ、殺すぞ。

ギンギンに睨みつけると、涙目になりトイレットペーパーを持つていた手が震えた。

ロマンスの神様の悪戯か、それは放物線を描いて向坂藍の机の上に落ちる。

先ほどの憎しみも薄らぎ、囁らすもグッジョブ、と親指を立ててウ

インクすれば白目を剥いて机に突つ伏した。

虚弱体質な男だと思いながら、視線を前の彼女に向ける。

だが考え方でもしているのか彼女はピクリとも反応しなかった。始めこそ一々反応を返してくれていたが、最近はややマンネリ化している気もする。

そもそも『落し物拾つて大作戦』も終わり時だらうか。

けれど彼女が個として俺を見てくれたあの瞬間を想うと、このトイレットペーパーは手放せない。

もう願掛けのようなものだ。

なんかこのトイレットペーパー作戦ならいける気がするのだ。

俺と彼女の架け橋となり、純白の道を繋げてくれる気がするのだ。いつも通りにぽんぽんと後頭部にトイレットペーパーを投げていた俺は、なんとなく時計を見上げて昼食の時間が近づいているのに気がついた。

今日も彼女は食事を取らずにじつと席に座り机を眺めているのだろうか。

それが例え俺を想つてのことだとしても、嬌げな姿は日に余る。どうしたものかと思案し、俺はいい案を思いついた。

昨日購入した色ペンの中から茶色と黒を取り出すると、ミシン田一つのところで切り取り絵を描き始める。

言葉で通じないことでも絵なら想いは通じるはずだ。

早く元気になつて欲しくて、食欲を取り戻して欲しくて、俺は机にかじりついて残りの時間で精一杯の絵を描こうと手を動かす。

体を癒すなら天使がいいだろ？

かきかきと脳裏に浮かんだイメージのままペンを滑らせる。

迷った末に結局サインペンにしたのだが、この滲みも慣れてきたの

で絵が上達してきた。

以前見た宗教画だと天使はわっかと羽が生えて真っ裸だった。

人体を模していれば色々な面で手渡せないが、幸い『あおいくん』はミニロップ。裸でも毛が生えているので問題ない。まず中心に『あおいくん』を鎮座させ羽と輪を描く。そこで俺は気がついてしまった。

天使の癒しの力はどのように放出されるか全く知らないといつのを。そもそも天使に癒しのイメージがあるが、具体的にどんな感じに癒すのか。

体から光を放出せるとでも言つのだろうか。

それとも手を添えて体に力を注入するのだろうか。

残り時間五分で描き始めたので昼間で時間がないのに、こんなところで詰まってしまった。

考える、考える俺。

俺の絵に彼女の元気が掛かっているんだ。捻り出せ俺。

悩んで悩んで悩み抜いたが、結局結論は秒針が十も進まない内に出た。

俺が『あおいくん』に癒されてる、と一番思える瞬間を表現すればいいのだ。

ちなみに俺は『あおいくん』を抱き上げた瞬間、くりくりとした眼にじっと見詰められる瞬間に癒しを感じる。

感情豊かで純真で真っ直ぐな瞳は俺の心を掴んで離さない。

つまり瞳から癒しオーラを出せばいいのだ。

結論が出れば行動は早い。

色ペンの中から黄色を取り出すと点描画の要領で幾つも細かく点を打つ。

光り輝く陰影を描写したいのだが、サインペンの先が太すぎどうで絵が上達してきた。

も上手く表現できない。

どうしたものかと悩みつつそれでも頑張っていると、無常にもチャイムが鳴り響いた。

そして同時にがらりと椅子を引く音が教室に響く。

間近で聞こえた音に驚き顔を上げると、まだ授業終了の合図も出でないのに向坂藍が立っていた。

こんな行動初めてでいつたいどうしてしまったのかと田を丸くする。どうやら彼女の行動に疑問を持ったのは俺だけではないようで、クラス中の視線が彼女に突き刺さった。

何をするのかと息を詰めて見守っていると、ふわり、と田の前でスカートが揺れる。

うちの学校の女子の制服はセーラー服だ。襟には白いボーダーがあり、胸元に結ぶリボンが赤と、昔の良き時代を髪飾りとさせるそれは限りなく黒に近い紺色がベースになっている。

この学校で彼女ほどセーラー服が似合う女は居ないと、翻るプリーツスカートに見惚れ俺はうつかりと行動が遅れた。

決してスカートが翻った隙間から覗く白い足に釘付けになつたわけじゃない。柔らかく滑らかな肌に触つてみたいと不純な想いを抱いて出遅れたんじゃない。

気がつけば彼女の姿は教室から消え、室内は水を打つたように静かになつた。

クラスメイト、教師も含み呆然とすること三分。我に返つた俺は、のそりと立ち上がり教師を睨んだ。

「・・・早く終れ」

悪友に変な部分で眞面目と言われた俺は、授業をサボることはあっても参加した授業は必ず挨拶をしないと落ち着かない小心者だった。

あつという間に過ぎ去る時間に、ふつと重いため息を吐き出す。田の前の席は空いたままで手には描き終えた『あおいくん』の肖像画。天使をイメージしただけありどこか神々しい雰囲気のそれは、自分でも中々の傑作品だったのでは非とも見て欲しかったのに。

机に肘をついて掌に顎を乗せる。

普段ならこの体勢で前に居る彼女の背中を見詰めつつトイレットペーパーを投げるのが日課なのに、昼時間から帰つてこないお陰で化学の禿の顔が見える。

横にすだれてる髪を未練がましくポマードでがちがちに塗り固める往生際の悪さを見ると、イラつときて書き取りたい衝動に駆られるがそんな気力も沸かず代わりにもう一度ため息を吐いた。

田の前のぽつりと空いた席がもの悲しい。

あの時追いかければ良かったと思つたときは時遅し、俊足の彼女の姿は何処にも見えず教室で待つても帰つてこなかつた。

一年生になつて登校するたびに田にした背中がなくなるなど違和感を感じてしまう。

自分がサボるならともかく、眞面目な彼女が授業をサボるなど信じられなかつた。

となると考えられるのは何らかの不確定要素により授業に参加できなくなつたということだが、まさか学内で危険があるとも思えない。体調が悪くて早退したのだろうか。それともまた保健室で横になつているのだろうか。

もしかして向坂藍は体が弱いのだろうか。

大いに有り得る想像に、どうして今まで気がつかなかつたのかと悔

やみながら机をぶん殴る。

何故今までその可能性を考えなかつたのか。

迂闊過ぎる自分に奥歯を噛んで激しい感情の揺れを堪えた。

向坂藍は一年生全体で考えても前から数えた方が早いだろつと思えるくらい身長が低い。

そして見るからに体重は軽く、スタイルはいいが風が吹けば飛んで行きそうな勢いで華奢だ。

俺が手首を掴んだら一回り半は余裕で出来そつた細い体で、クールだが淑やかで大人しい。

運動神経抜群で体育の授業でも伸びやかに動き回つているから気がつかなかつた。

先週から男女合同でバレーの授業だが、全身のバネを使って伸び上がりながら打つスパイクは素晴らしい。

あの身長でスパイクを打つなど普通なら無理だろつと、まるで背中に羽が生えているのではないかと思った。

ちなみに男女合同とは言つてもきつちりとポートは一面に分けられてるので、俺は彼女と同じチームに参加できない。

変わりにちらりと見えた頃とか、細く白い足に見惚れた輩にバレーで鉄槌を下しておいた。

俺も運動は苦手じゃないので顔面狙いのスパイクはほぼ命中。

その際ちらりと隣のコートを見たとき、俺がスパイクを決めた瞬間を彼女が見ていってくれて嬉しくてひつそりと笑つてしまつた。

思えばあの時も顔色が悪かつた気がする。

きっとチームメイトに迷惑をかけると思つて、体調が悪いのを我慢していたのだろう。

考えれば考えるほど嫌な方向に想像が働き、こうしてはいられないと席を立つ。

黒板に文字を書いていた禿が大袈裟に体をびくつかせ、ゆっくりと

「ひりを振り返った。

「・・・気分が悪いんで早退します」

返事を待たず教室を出ると、保健室に向けてダッシュした。

保健室に入ると保健医は留守中だったらしい、そのままカーテンで仕切られている一角を見つけそろそろと近づく。

そして気を使いながらそっと顔を覗かせ、そこにある顔を認めた瞬間に無駄な気遣いをした自分に苛立つた。

「・・・なんでテメホがここに居る？あん？」

だらしなく爆睡する男の襟首をぐつと掴み持ち上げると、遠慮なくがくがくと前後に振つてやる。

途中で悲鳴か奇声かを上げていたが完全に無視だ。
彼女を見つけたと思った瞬間の喜びを返せ。

こつそりと寝顔が見れるかもと喜んだ気持ちを返せ。
壊れかけの人形のように首をがくんがくんと揺らす男を乱暴にベッドに投げ捨てる、変な体勢で落ちた所為でうめき声を上げて蹲つた。

「いつてえー、何だ？何が起こった？どうしたんだ、俺？」

「こんなところでグーグー寝てんじゃねえよ。今は授業中だろ？が「あれ？お前佐倉じやん。何してんの」「なんどいで？授業は？」

「サボった」

「どうして？」

「彼女が虚弱体質で倒れているかと思ったからだ」

「彼女？」 ああ、向坂藍か。そいや今年は同じクラスなんだつたな」

がりがりと自前の栗色の髪を搔きながら身を起こした男は、中学時代からの腐れ縁の悪友、木戸竜也だつた。

垂れ目がちな瞳をしょぼしょぼと眠そうに瞬きしながら大あくびした木戸の頭をぶん殴る。

頭を押されて悶絶した彼は、涙目になりながら睨んできた。

「いつてえな！何だよお前をつきから」「彼女は何処だ？」

「向坂？ここには居ないだろ」

「居ない？だが体が弱い彼女は保健室に来たはずだ。そういうやなければ今頃授業を受けているだろ？」「

「はあ？向坂藍の体が弱い？そんな噂聞いたことないぞ？」

「噂にならないのも当然だ。俺とてさつき気がついたばかりだからな。彼女を見つけ出し、俺が作った体調回復祈願の想いを籠めたこれを渡さねば」

「何それ？」

「『あおいくん』の絵だ。俺が世の中で彼女の次に癒される我が家のアイドル、ミニロップだ」

「ああ・・・あのウサギか。確かに可愛いよなー。お前絵だけは上

手にし、アピールにはいいんじゃない？見せてみろよ

「・・・仕方ないな」

いいアピール方法だと褒められたので渋々握り締めていたトイレットペーパーを渡す。
だが俺が丹精籠めて描いた絵を見た瞬間、木戸は鮮やかに動きを止めた。
指先で摘んだトイレットペーパーに目を丸め、真っ青になり汗を搔く。

もしやここが保健室に居たのもあながちサボりではなかつたのだろつか。
だとしたら悪かつたと思わないこともない。マジンコの心臓並みに罪悪感が沸く。

「どうだ？」

「どうだつて・・・お前向坂が好きなんだよな？嫌いとか憎んでるとか呪つてやりたいとかそんな感情は持つてないんだよな？」

「何を今更」

問われて頬が熱くなる。

どう考へても今の俺は真つ赤になつてゐるだろうから、照れている様を見られないようそつと俯いた。

俺の片思い暦は三年と長い方だが、やはり面と向かつて誰かに想いを吐露するなど恥ずかしい。

軽々しく好きと口に出来る奴も居るだろうが、奥手の俺には明らかに無理だ。

そりや向坂藍は可愛いし美人だし頭良いし運動神経抜群だし大よそ欠点など見つくれない片思いの相手だが、それとこれとは別だ。こうノリや勢いがなければ想いを赤裸々に告げられるはずがない。そうでなければ長々と三年も片思いしていないし、とうに度胸よく告白している。

「つづーかもじもじするな気持ち悪い。お前の見た目で照れて恥じ入るとかアウトだから。無理、純粋に女の子が好きな俺には受け入れられない」

「んだとコラア！俺だつて恥じらいたい時くらいはあるんだよ！好きな相手の話題とかこつぱずかしいもんだらうが！テメエみたいに吹けば飛ぶような薄っぺらい人間性してねえんだよ！奥手を馬鹿にすんな！」

「奥手を馬鹿にしてんじやない。お前を馬鹿にしてるんだ」「喧嘩売つてるのか？買つぞ？二倍にしてきつちつ支払つてやるぞ？」

「……せうじやなくてさ、だからお前は向坂藍が好きなんだよな？」

「……………当然だ」

「好きな相手にこれ？このウサギ田からビーム出てるぞ？羽は生えてわっつかもあるし、どっかに昇天しようとしてるぞ？今までに召される瞬間？それとも今までに滅する瞬間？」

「阿呆。これだから芸術的センスのない男は……。これはな、俺の『あおいくん』が天使になり癒しのオーラを放出しているさまを描いたものだ。見ろ、この神々しいまでの『あおいくん』の羽ばたきを。点描を利用した癒しのオーラなんて特に手間が掛かった部分だ」

「…………佐倉」

「ん?」「

「今度また少女マンガを貸してやるから、わづ一度勉強しなおして
来い」

ぽんと肩を叩く悪友は、どこか疲れたよつに重いため息を吐き出した。

彼の妹が恋愛バイブルとして愛読している少女マンガは中々面白いく
が、どうしていきなりその話題になつたのか。

首を捻る俺にトイレットペーパーを返すと、彼は芋虫のとうに布団
に包まり背を向けた。

結局その日一日向坂藍が教室に戻ることはなく、俺は不安と心配で
胃が痛くなる思いをしながら帰路についた。

明日には絶対にこの絵を渡そう。

少しでも彼女が元気になってくれるよう、俺も及ばずながら協力せ
ねば。

普段より重たく感じる体を引き摺り家に帰った俺は、トイレットペー
パーのあまりが鞄に入つてゐのを見て驚いた。

彼女にアピールを始めてから、トイレットペーパーが芯に残つたま
まなど、初めての経験だった。

木戸君の憂鬱（前書き）

親友の彼視点です。

俺の名前は木戸竜也。
きどりゅうや

今をときめく青春真っ只中の少年だ。ちなみに頭に美と付くことが多いが、美少年というよりは美青年の方がより正しい表現だろう。何しろ俺の身長は180cmに背が屈くほどであり、華奢な印象も与えない体つきをしている。

痩身であるが鍛えているし、痩せすぎの印象も憐げな様子も欠片もない。

垂れ目がちな瞳に栗色の髪。来るもの拒まず、去るもの追わず。余裕のあるスタイルを崩さないのが俺のスタンスだ。

広く浅くを人付き合いのモットーにしている俺だが、親友とも悪友とも呼べる存在も一応居たりする。

中学時代からの付き合いの腐れ縁だが、見た目も雰囲気も俺とは百八十度正反対の位置に居る、学校で番長と呼ばれる存在だつたりした。

ちなみにそいつの名前は佐倉葵。
さくらあおい

名前だけ聞くと何となく可憐な美少女を想像してしまいそうだったが、どうしてコイツにそんな名前を与えたんだお前の両親と聞きたくなるほど名前負け、いや、ある意味名前勝ちしている男だ。

太く短い首に、悪役プロレスラー顔負けの強面、ガタイよすぎる体型に鋭すぎる田つき。

明らかに只者じゃないオーラを出している彼は、意外にも割りと純情で天然だ。

どれくらい天然かと言つと、恋の相談がしたいと家に突然押しか

けてきて、俺の小学五年生の妹に恋愛バイブルとして押し付けられた少女漫画を読み込みダダ泣きするほど純情で、一目惚れした相手に対し明らかに間違ったアプローチをするほど天然だ。

先ほど授業をサボり保健室で昼寝していた時に見せ付けられたブツは、俺の人生で新しい何かを生み出してしまいそななくらい衝撃だった。

何を考えたのかトイレットペーパーの切れ端に描かれた劇画調のリアルなミニロップ。

その絵に描かれたウサギを良く知る俺は、絵の上手さには素直に感嘆した。だが、表現は恐ろしすぎた。

実際にリアルなウサギはギンギンに瞳を開き、黄色の光線を一直線に放っていた。

黄色のペンで点描画の要領で描かれていたが、あれはオーラというには存在感がありすぎる。

羽と天使の輪（本人曰く）を誂えた姿はどう見ても彼が言つほどの癒しは与えられない。

むしろ残忍なまでの恐怖を「え、手渡されたら俺なら呪われたと思うだろう。

というか、あれと同じ空間で眠れない。寝たいとも思えない。

かと書いて捨てるのも恐ろしく、恐怖に魘され睡眠不足になるだろう。

もう何処をどう突っ込んでいいか判らない彼は、今現在俺の傍らで仕事をこなす美少女に三年間も片想いをしていた。

真っ黒で艶やかな髪を腰まで伸ばし、物静かでありながら独特の存在感を放つ彼女の名前は向坂藍。

俺も同じ中学だったので彼女をある程度知っているが、彼女は俺を知らないだろう。

隣のクラスで何度も姿を見かけたが、いつだつて視線が絡んだことはない。

俺もある程度有名だつたが、噂を歯牙に掛けない彼女はきっと興味すら持つてない。

事実隣で仕事をしていても最低限の会話しかなく、淡々と無表情で数字を合わせていた。

前生徒会長は彼女の数学能力に目をつけて何度もスカウトしていだというが、今まで会計を兼任していた俺から見てもその能力は素晴らしいとしか言いようがない。

出来ないことは何もないのではないか、と言われた完璧少女は、傍で見て実際にその印象を強めた。

オニキスの瞳の周りは長い睫毛が縁取り、清楚で着物が似合いうな美少女は、電卓を叩く指を止めない。

どれだけ見詰めてもちらりとも意識を向けてくれない。

その様子に、ちくり、と胸の奥が痛む。

いつの頃からか与えられる痛みに、俺は深いため息を吐き出した。

悪友が彼女に惚れたのは三年前。

そして彼の想いに釣られるように、俺が自分の感情に気付いたのは一年前。

逢うたびに無理やり話を聞かされ、何か情報がないかと尋ねられ、たまに見かける姿を追う内に、ミイラ取りはミイラになつていた。

ありえないくらい最悪なパターンだ。

親友とも呼べる相手が好きになつた少女に、横恋慕するなど馬鹿馬鹿しくて口にも出来ない。

応援すると背中を叩きながら、それでも失敗してしまえ、と心のどこかで考えてしまつていて。

さつきのトイレットペーパーに描かれた悪魔も、その瞬間に正確に指摘してやればよかつたのに出来なかつたのは奪われたくなかったからだ。

自分のものにならなくてもいい。けれど、誰のものにもならないで欲しい。

どうしようもない愚考に、机に肘を突いてもう一度ため息を吐き出した。

彼がどれだけ彼女を好きか、一番近くで聞かされていたから誰より知っている。

きつとその想いは俺なんかより遙かに深くて、そしてずっと純粹だ。

方向性は間違ってるが、俺の小学生の妹にまで少女漫画を借りて、内容に大泣きしながらも好かれようと努力する姿には感服する。

だから、この想いは気のせいにしなくてはいけない。

所詮この想いはまがい物。親友の熱が移つたような気になつているだけ。

憂鬱な気分で机に懷いていると、不意に横から視線を感じた。

チラリと視線だけ向けると、表情こそ変えないものの小首を傾げて不思議そうにこちらを観察する向坂がいて、らしくないが敬謙なる信者のように神に祈りたくなる。

どうか、心の天秤が傾いてしまう前に、俺の前から彼女を連れ去つてください

微塵も信心深くない自分の願いを神様が受け入れてくれるかは、

分の悪い賭けかもしねり。

トイレットペーパーの呪いの効能

私の名前は向坂藍。

至つて一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校一年生である。

私にはつい昨日まで頭を悩ませるすさまじい悩みがあつた。それは、後ろの席の番長が関係している。

彼の名前は佐倉葵。最近ではもう私には彼のキャラクター性は判らない。ただ判るのは、ひと睨みで熊も引付を起こすだらう鋭すぎる三白眼に、長身の男子を吹っ飛ばす腕力の威力、あと節分の鬼の役をやつて保育園に行つたとしたら園児が氣絶するだらうと想像する程度だ。

基本的に友達が居ない私は、他人との「ミミコニケーションをとる」のは苦手だ。中学になり引っ越すまで近所に住んでいた私を溺愛してくれた母方の親戚は感情が豊かだと言つてくれたが、父方の遠い血縁関係の幼馴染には無表情すぎて不気味だと子供の頃から言われ続けた。

何かと言つと絡んでくる幼馴染に柳眉を吊り上げた母方の親戚が笑顔で『俺の可愛い藍を貶すなんて信じられないねえ。ちょっと説得してくるよ』といきなりバッドに釘を打ちつけ始めたのも、今ではいい思い出だ。

柔らかな笑顔を保ちつつ花束の真ん中に釘つきのバッドを差し入れて一体何をしたのか謎だが、幼馴染の口から語られることもない。ただ翌日から暫くの間、随分と恭しく扱われたのを覚えている。

ああ、違う。今は恭弥のことなんてどうでもいい。

問題は私に「コミュニケーション能力が不足している部分にある。長らくクラスメイトからも遠巻きにされ続けた私は、他人の感情の機微に鈍い部分がある。表情筋だつて怒つたり笑つたりしていなからあまり動かないし、寝起きでぼうつとしていたら顔を真っ赤にした恭弥に不気味だと叫ばれた。

今まで友達が出来なかつたのだつてどうやつて話しかければいいか判らなかつたからだし、嫌になるほど自分の不器用さは自覚している。

しかしながら私は問いたい。

神様、彼の行動の意味が理解できないのは、私の能力不足の所為ですか、と。

小説や漫画、ドラマや映画。学園ものと呼ばれるジャンルのものを幾つも見てきたが、後頭部にトイレットペーパーを投げられる人間なんて見たことないし、投げ続ける人間も見たことない。

道行く人間に聞いてみても、トイレットペーパーを授業中絶えず投げ続ける人間とコミュニケーション取れますかと言われても、イエスと答える人間は何割居るのだろうか。

私の予想では百人聞いて一人いるかいないかだと思う。

そしてあのトイレットペーパーに描かれた呪われた絵を見たら、その一人も消滅するに違いない。

長いわけではないが今までの人生を平穏に生きてきたと思つている。

根暗だがいきなり奇声を上げて走り出すわけでもないし、不器量でも他人のお目汚しをしないようにひつそりと生きている。これといつて特別な才能はないが、誰かに迷惑をかけすぎる生き方はしていないはずだ。

クラスの片隅で存在するだけならいじめにもあつていなかつたし、このまま地味な人生を過ごしていくのだと思い込んでいた。

なのに蓋を開けてびっくりだ。新しいクラスになり心機一転、今年こそ変わろうと気合を入れていた最中に、まさかクラスメイトから、しかも学校中どころか近隣の不良まで恐れる番長から呪いを受けようなんて誰が想像できるか？否、誰も想像出来るはずがない。それこそお天道様でも判るまいという奴だ。

トイレットペーパーを投げ続ける奇行の拳句、頭に置かれた呪いのペーパー。あれは彼が手書きしたのだろうか。だとすれば技術力は凄いが、神様も文字通り罪な才能を授けたものだと思う。喧嘩上等とばかりの鋭すぎる二白眼や、立派過ぎる体型、さらに進学校である高校で上位をとる頭脳に併せて人を呪う才能。

いや、良く考えるんだ私。曲がりなりにも神様が人間にそんな能力を与えるだろうか。神様の祝福を受けた人間って言うより、むしろ悪魔の洗礼の方がしつくりくる。冗談のつもりだったのに、何処から何処までを冗談として考えていたのか判らなくなり、怖くなつてきたので考えるのを止めた。

とにかく受け取った呪いのペーパーは昨日恭弥の鞄に潜ませて置いたから、何か不幸が起こるとしても恭弥からだらう。心臓から血を流す憐れな兎は彼にどんな影響を与えているのだろうか。

まさかいきなり髪の毛が全部なくなつたりしないだろうが、そうなつたら憐れすぎる。後頭部狙いが本気で髪の毛の消失を狙つていふのだとしたら、私は恭弥にお詫びに髪を作つてあげよう。それが駄目なら額に六つの点でも書いてやる。どつかの漫画のキャラクターミたいで自然な感じだ。幸いにして顔はいいからきっと剃髪も似合つだらう。

ついでに子供の頃の怨みも晴らせて一石二鳥だ。精々ファンの女

の子に嘆かれるがいい。

トイレットペーパーを後頭部に投げ続ける番長の考えは全く理解できないが、それでも私には逃げ場所が出来た。いつも引きこもり生活をしてやううとまで考えたが、正式に生徒会になれたら公認で授業をエスケープできる。成績の維持は必須だが、これで後頭部の襲来を免れるなら安いものだ。

つらつらと考えている内に学校に着き、下駄箱の蓋を開けた。登校時間は帰宅部にしては早い私は、朝鍛をしている青少年たちの声をBGMに靴を履き替え ようとして固まった。

学校用のスリッパの上に、見慣れない封筒が置いてある。桃色の便箋にワンポイントの黒兔のシール。随分とファンシーなそれに息を止める。一昔前の漫画でよく読んだ光景だが、経験するのは初めてだ。

経験はないが、もしかしてこれはラブレターというものだろうか。

年頃の乙女らしい淡い期待に胸を高鳴らせ、学校用のスリッパの上からそつと手に取る。裏返しても差出人の名前はなく、頬を赤らめながら丁寧にシールを剥がした。

昨日の帰宅時にはなかつたので、私が帰つた後から、今日の登校前までに入れておいた計算になる。

こんな可愛らしい封筒を使う男子など想像できないが、まさか不幸の手紙ではないはずだ。小学校時代に一斉を風靡したそれは、学校中に回つても私の元には届かなかつた。それくらい人との付き合いがない私に、今更それはない。

とすると、やはり恋文と考えるのが妥当だらう。

自然と緩む口元を気合で堪えながら、中に入つているものに手を

伸ばす。

手先に触れたなんともいえない感触に、ん？と慌てて封筒を広げて覗き込み固まった。

眼が合ってしまった。

どうしてか知れないが、観音開きになつて封筒の中身は、とんでもなくおどろおどろしい物体だった。

オレンジがかつた毛並みの劇画調兎が、ぎょろりと大きなブラウンの瞳でこちらを見ていた。実際にリアルに丁寧に描かれている。今にも動き出しそうな躍動感を感じさせる作品だが、これは空想上の生き物だろう。

だつて、兎なのに目からビームが出てる。ビームが出てる上に羽が生えていて、頭には光輪まである。しかも何か臭つているのか、体中から黄色いものが出ていた。黄色で表現されるのは大体が異臭だが、彼だか彼女だか判らないこの生き物は、どんな臭いを漂わせているのだろうか。

もしかして悪魔の使いか何かだらうか。今まさに天に召されようとしてるのか、それとも異界から召喚されたのか全くわからない。芸術的センスがない私だから理解できないのだろうか。いいや、これはそんな生ぬるいものではない気がする。

だらだらと額から汗が流れ、呼吸と鼓動が早くなる。

つい先日、これと良く似たものを受け取った気がした。異常に劇画調の兎の絵を、徒ならぬ人物から頭に置かれた気がした。

ぎらぎらと音が聞こえそうなぎこちない仕草で周囲を窺い、冗談じゃなく息が止まる。

素早い動きで隠れたが、その巨体がはみ出でている。ちらりと見える制服と、半分以上が出でている顔。ぎらぎらと輝く二白眼を細めて獲物を狙う猛獸のようにこちらを睨みつけていた。

大きな手が下駄箱の端を力強く握っているお陰で、めきめきとした破壊音が聞こえ、冷や汗の勢いが増す。確かあの場所は相沢君だか、相田君だかの下駄箱だつたと思うが、もう今日は開けれないだろう。彼らは職員室でスリッパを借りるしかない。

いや、それはどうでもいい。むしろ今は自分の命の心配だ。殺られる。これは絶対に殺される。だってそんな目をしてる。血走つて充血してる。唇なんか噛み締めすぎて血が出てるし、未だに下駄箱はめきめきいっている。

もしかして、私が彼から渡された例の物を恭弥に押し付けたのがばれたのだろうか。だからあんなに血管ぶつちぎれそうな勢いで怒り狂つてるのだろうか。

恐ろしさからまたきこちない動きで俯いた私に、自然とトイレットペーパーに描かれた絵が入る。震える手で上手く掴めず下に落ちたトイレットペーパーには、兎の絵以外にも何かが書かれていた。

両目1・2を誇る私の視界に、しっかりとそれは焼き付く。

真っ赤な文字でただ一言。『生きろ』と書いてあつた。

静かな玄関に野球部（多分）の『ラスト、一本！』との掛け声がBGＭ代わりに響く中、私の意識は徐々にブラックアウトしていく。

『生きろ』って何、『生きろ』って。どういう意味？何か生命的な危機が近づいてるの？むしろあなたの呪いに気をつけろって忠告？本人なのに？と頭のどこかが冷静に突つ込む中、このまま行つたら頭蓋骨陥没かもしれないと馬鹿みたい考える。

これはもしかして、あの呪いのトイレットペーパーの効果かと、うつかり押し付けてしまった幼馴染を初めて心から心配した。

視界から景色が消えたと思った瞬間、甲高い悲鳴が聞こえた気がしたが、きっと氣のせいに決まっている。

トイレットペーパーに『あい』 注入！（前書き）

葵君視点です。流血表現あります。

トイレットペーパーに『あい』 注入！

俺の名前は佐倉葵さくらあおい。

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたつて普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払つていただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまつた。

無駄に大振りなフォームで殴りかかつてくる雑魚を最小限の動きで避け、カウンターのパンチを顎に叩き込む俺は、現在呼び出しの真っ最中だ。それも可愛らしい女の子なんてことはなく、近隣の不良校のなんたらかんたら言う同級生。同じ中学出身で、中学時代もなにかと絡まれたが高校に入ってから頻度が上がつている気がした。それでも全く興味が持てない俺は、奴の名前すら知らない。

大体今時真っ赤に染めた髪をリーゼントにするとか、どんなセンスだ。高校学ランだからとボンタンを穿き、長ランは中が赤地で上り龍の刺繡がしてある。金糸銀糸で纖細に縫われたそれには一言。『夜露死苦』と入つてるが、誰に何を『夜露死苦』したいのか一切理解できない。むしろそんなに夜露死苦したいなら、せめて背中に縫い付けると倒れてるところを髪を引っかんで忠告してやつたら、顔面に唾を吐きかけられた。思わず道路に叩きつけてしまつたが、この場合俺は悪くないだろう。額が割れ鼻血も止まらないようだが、自業自得だ。

隣で暴れていた小倉も片をつけたらしく、いつもどおりの喰えな

いへラへラ笑いで近づいてくる。にやけた面を眺めていると、つづく今日は厄日だと深いため息を漏らした。

「厄介」とに巻き込まれているが、俺は別に喧嘩が好きなわけじゃない。降りかかる火の粉を払つていたら気がつけば強くなつていただけの、あだ名が『番長』の一般人だ。不良を自称した記憶もないれば、喧嘩以外の何かに手をつけた記憶もない。あえて言えば髪を染めるくらいだが、高校生にもなればこの程度で非行と呼ぶ人間も居ないだろう。

自分で言うのもなんだが意外と文学を愛し、芸術を愛するユニークな性格をしていると思つ。事実特技は絵を描くことで、これは唯一求愛に応用するほどの自信を持つていた。

何しろ、俺はこの絵で片想いの彼女の意識を惹き付けるのに成功したのだ。奥手で恥ずかしがりやな俺の精一杯のアピール方法だが、絶対に間違つていないと自信がある。

特に端整筆めて描いた飼いウサギの絵は絶品だ。誰が見ても俺の可愛い愛ウサギとひと目で判るほど写実的だと思つ。少しばかり手を加えれば一気に幻想的な雰囲気が増し、我ながら見事な作品が出来上がる。

今日も今日とて出来上がった自慢の作品を悪友の家に居る師匠に見せようと学校から帰宅中、たまたま近道しようと通つた裏道で喧嘩中の小倉と遭遇し、たまたまその相手が中学時代の知り合いで因縁をつけられ今に至る。

鼻歌交じりの爽やかだった気分は台無しにされ、投げ出された鞆の中の大変な絵が汚れて居ないかチェックした。幸いなことに教科書の間に挟んで保存しておいたそれは欠片の破損もないが、気分を害されたのには違ひがないため倒れていた頭をもう一度踏みつける。

かえるが潰れたような鈍い声が聞こえたが、一切無視だ。

「あれ？先輩帰っちゃうんですか？」

「・・・ああ」

「もうちょっと遊びましょうよー。折角久しぶりに相手してくれる奴らなのに」

「俺はいい」

「えー？つまんないっす」

ブーブーと文句を言つ小倉をじろりと睨み付ける。喧嘩大好き殴り合い大好きなドMでドSな小倉と違い、極めてノーマル思考の俺はあいつほどイカれた頭をしていない。血を見て興奮してバーサーカーモードに突入もしなければ、相手が倒れた後も執拗に甚振る気もない。

小倉は俺より弱いが、俺より遙かにやばいタイプだ。一度田をつけたらとことんまで相手を追い回し勝負を挑む。勝てばそこまで、満足するまで甚振り倒す。負ければ勝つまで付きまとい、一見すると無邪氣にも見える様子で近づきながらも常に隙を伺つている。

今だつて間違えたふりをして拳や蹴りが飛んできた回数は片手じゃ収まらない。一発一発に体重が乗つていて、喰らえば骨くらい折れていただろう。

首に手を当てクルリと回す。いいつの相手よりも俺には重要な使命がある。

俺の恋の成就のために、俺は行かなくてはならない。そう、いつでも心の中にある、黒髪を靡かせた凛とした佳人のために、行かねばならないのだ。

「興味がない」

俺が興味があるのは心の女神、向坂藍むきさかあいだけ。

闇を紡いだ漆黒の髪は、絹糸よりも尚美しく。白皙の肌に桃色に染まる頬。ふるいつきたくなる唇は紅を塗らずとも艶やかで、サクランボより美味そうだ。俺よりも随分と低い身長で、華奢な体は文字通り触れれば折れてしまいそうなほど。腰など片手で掴めそうだし、確実に片手でも持ち上げれる。小さな頭が乗る体はバランスよく整つており、細い足は同じ日本人か疑いたくなるくらい長い。

最近気がついたのだが、下から見上げるとオーネックスの瞳が少し潤み、悶え転げそうになるほど愛らしい。心中では『可愛いぞー！』と大絶叫だが、実際に言葉にすると引かれそうなので堪えてい る。

何しろ二年越しの片想いだ。今年に入り同じクラスになれただけでも喜ばしいのに、この苗字のおかげで前後の席ときている。当たり前だが席替えなどといつ邪道なシステムは先日選ばれたクラス委員長に丁重にお願いして遠慮してもらっている。

隣同士になれたら、なんて夢想しなくもないが、何しろ俺は超がつく奥手。隣になれば横顔が見れるかもしれないが、今のようにじっくりとはいかない。やはり後ろから小さな頭にある渦を毎時間眺めるのが幸せだ。呼吸するたびに微妙に上下する肩とか、たまに邪魔になつた髪をさらりと後ろに流す仕草とか、小さな手がかりかりと動く姿とか、そんなのを永遠に眺めていたい。

その愛らしさは我が家のアイドルミニロップの『あいちゃん』の上を行く。勿論『あおいくん』よりもだ。『あいちゃん』も世界で類を見ない愛らしさウサギだが、番の『あおいくん』も負けていな

い。夜の闇を纏う黒毛が自慢の『あいちゃん』は大人しく控えめな性格の女の子で、『ゴールデンオレンジ』の毛色の『あおいくん』はそんな『あいちゃん』を恋い慕うヤンチャ盛りの男の子だ。

自慢じゃないがうちのウサギたちは可愛い。俺が家に帰ればいそいそと小屋の入り口に立ち、ひくひくと鼻を鳴らして今か今かと瞳を輝かす。今まで動物を飼ったことがないからその良さを知らなかつたが、彼女に出会い惹かれたウサギの中でもこの一匹を選んだのは正解だつたろう。何しろうちの子は世界一可愛いのだから。こう後ろ足のあの丸いフォルムや、触るとひくりと動く耳や、大きく円らな瞳や、たまに漏らす良く判らない鳴き声などもう愛しそマツクスだ。

声なき声で叫びながら、ひりひりと部屋を転げまわっていたところ、不審人物でも見るような目で母に睥睨された。すぐさま姿勢を正し何もなかつたふりをしたのだが、あの目から少しだけ母の対応が変わつた気がするけれど氣のせいだと思いたい。

そう、話しあはれたがうちの子はとにかく愛らしいのだ。しかしその愛らしさを持つてしても彼女には叶わない。何せ彼女は女神だ。きっと春の女神か花の女神か、いや、清廉な空気を思えば月の女神でもいいかもしない。留まることを知らない美しさに敵うものなど居るはずがない。たとえ神レベルに愛らしい我が家のミニロップも、彼女にかれは使役獣になる。ん? 可愛い女神に可愛い使役獣。これは予想以上にしつくりかもしない。

つらつらと想いを膨らませて歩いていると、不意に後ろから声を掛けられた。

「あれ? そこを歩くのはもしかして佐倉?」

のんびりとした声は聞き覚えあるもので、振り返れば案の定顔見知りが私服で立っていた。ラフな格好でコンビニ袋を持つ彼は、最寄のコンビニで買い物帰りらしさ。訝しげに眉を寄せて首をかしげている。

「・・・木戸」

「どうしたんだよ、こんなとこド。お前とかい」とは逆方向だろ?」「いや、学校を出る前にメールが来てな。お前の家に行くところだ」「メール?つて、いらからか?」

「ああ」

いらとは木戸の妹の名だ。小学五年生にして三人の彼氏が居る自称恋のエキスパートの彼女は、俺が片想いを始めてから恋の師匠をしてくれている。ちなみに渡されるのは彼女のバイブルの少女漫画が主だが、これがまた泣ける。今まであんな女々しいものと馬鹿にしてきたが、きゅんと胸を締め付ける片想いの描写とか自分と置き換えると畳 木戸の家は和風建築の平屋だ をどんどんと叩きまくるくらい感情が抑えきれなくなる。あまりに殴りすぎて畳を凹ませたら弁償させられたくらいだ。

年は下だがかねてから彼女の恋愛話には舌を巻いていた。恋愛経験豊富な相手を師匠と呼ぶのに時間は掛からなかつた。

携帯を弄りメールを見せてやると、木戸は複雑そうな顔をする。彼は兄としても少し妹には男関係を整理して欲しいらしいが、その内刺されるぞとの忠告は流石に行き過ぎていいる気がする。

そんなこんなで彼を伴い師匠と語り明かした俺は、手描きの絵に一文書き添えることにした。

ぱくぱくと高鳴る心臓を宥め、深呼吸しながらそつと目的のロッカーを確認する。『向坂』と書かれたそれは学年どころか学校でも唯一だ。俺が調べたのではない。何故か情報通の木戸から聞き出した。

とにかく、彼女のロッカーの前に立ち、愛らしい色合の封筒を両手できゅっと握り締める。皺が寄りそうに鳴つたので慌てて力を緩め、祈るように額に当てた。

今日は俺の一世一代の晴れ舞台だ。いや、清水の舞台から飛び降りるひだ。ん？ 何か違う気もするが、とにかくそんな日だ。

昨日、師匠の下で愛読書を拝見したのだが、今は和風の「ミック」に嵌まっているらしい。平安時代の男女の趣を嗜みながら切ない女性の心の揺れ動く様を描いた傑作品は涙なしには読めなかつた。何しろ相手の男が最低で、主人公に文を送りながら同時に二人、三人へと同じような手練手管を使って女をたぶらかしていた。最終的にその男が本気になつたときには遅く、主人公は影に日向にと支えてくれた幼馴染の青年へ身も心も捧げるが、彼の誠実さつたらない。

どれだけお色気たっぷりの女が迫ろうと、親に縁談を進められようど、政敵となつた主人公の初恋の男に陥れられようと諦めずに真っ直ぐに志を貫いた。そして遠方から実直であるが想いの籠つた文を送り続け、とうとう主人公の心を射止めたのだ。

あれを読んで目が覚めた。やはりメールで告白など邪道だ。顔をあわせて行うには勇気が足りない俺には、恋文こそが丁度いい。というか、そもそもメールアドレスを知らないのだが。

とにかく手紙の素晴らしさを知った俺は、自分なりのアピール方法である絵も交えて彼女に一番伝えたい一言を書き添えた。

即ち病弱で華奢な彼女に想いを籠めて一言、『生きる』と。

何しろ彼女は儂げで可憐で吹けば飛んでしまいそうなくらい華奢である。先日も目の前で倒れられだし、とにかく健康に関して心配だ。

彼女が儂くなってしまえば、俺の人生も儂く消える。俺の想い全てを籠めた一文と、愛のキューピットである『あおいくん』の絵。これは昨日保健室で寝ていた木戸にも見せてやつたものだが、人生でベストストリーに入る傑作品だ。

愛らしい瞳から光が溢れ、キラキラと輝く体に天使をかたどる羽とわつか。どう考へてもキューピット。俺と彼女を繋げてくれる、俺の想いを伝えるキューピットだ。

正直こんなにあからさまに想いを伝えて大丈夫だろうか。あの漫画を参考にすればもう少し密やかに想いを忍ばせたものだが、不器用な俺には直接的な表現しか出来ない。

どくどくと鳴る心臓の音を意識しながら、下駄箱の小さな上履きの上にそつと封筒を滑り込ませる。桃色の便箋に、彼女のイメージである黒ウサギのシール。コレクションの中でも特にお気に入りを使つたのだが、気に入つてもらえるだろうか。

以前師匠の家で読んだ漫画には、裏表の激しい美少女が恋文を見つけた瞬間にびりびりに破つたりしていたが、まさかそんなことにならないだろうか。

無駄に緊張してぎこちになる体を強張らせ、彼女が来たら判るようにそつと下駄箱の陰に隠れる。彼女の登校時間は部活に入つてない割りに早いと木戸から聞いているので、きっとそろそろ来るだ

る。ひ

時計の秒針を気にしながら待つこと十分弱。ついにその一瞬はやつてきた。

かたり、と音が聞こえ、顔を覗かせると、神々しくも朝日をバッタに靴を脱いだ彼女の姿。

今日も艶やかな黒髪を靡かせ、凛と背筋を伸ばす姿がうつとりするほど麗しい。見惚れずには居られないいでだちに暫しほうつとしていたが、その白魚の手が下駄箱に掛かり、ごくりと息を飲んだ。あの中には俺の入れた恋文が入っている。

果たして吉と出るか凶と出るのか。

瞬きすら惜しんで眺めていると、手紙に気がついたらしい彼女は切れ長の瞳を丸くした。珍しくもあからさまな表情に、こんな時でも胸がときめく。心臓が破裂しそうに緊張していても胸はときめくものなんだなと、冷静な頭が暢気に考えた。

逡巡するように動きを止め、ゆっくりと小さな掌を伸ばして封筒を持ち上げる。表面を見て、ひっくり返して裏返したのを確認し、俺は重要なことに気がついた。

名前を書き忘れてしまったのだ。

あれほど傑作品の絵に、想いを籠めた一文を添えた挙句差出人不明。何たる失敗。何たる手落ち。

ぎりぎりと奥歯を噛み締め手近に合った何かを握る。力をいれるたびに奏でられる不協和音すら耳に入らない。

もし万が一あれを他の誰かからと勘違いされ、しかもそれを利用した相手の求愛に彼女が乗つてしまつたらどうしよう。自分で言つのもなんだが、あの恋文は他に類を見ないものだろう。

彼女が相手を勘違いし、尚且つあの手紙を気に入つて嬉しいと相手に告げたら、俺の心は張り裂けるだろう。ついでに相手の男の顔も張り裂けるだろう、勿論俺の手で。

中身を取り出して瞬きすらせずに見惚れる姿に、喜んでいいのか悲しめばいいのか全く判らない。

手の中でめきめきと音を立てて形を変える『何か』に更なる力を籠めれば、ゆつくりと、それこそ映画のワンシーンのように彼女がこちらを振り返った。

一瞬の永遠。

夜の闇よりも美しい漆黒の双眸が俺を捉える。

その瞬間、俺の心臓は確かに止まつた。

三年間憧れ続けた恋しい人は、ただ一人俺だけをその瞳に映す。

この幸せが誰に理解できるだろうか。

今が永遠に続けばいい。そんな愚かな願いは、瞬きする間も続かなかつた。

「つ

息を呑んだような音が聞こえ、彼女の力が膝から抜ける。長い黒髪が扇形に広がり、手が宙を搔くようにして動いた。こちらを眺めていたオニキスの瞳は閉じられ、顔は真っ青どころか白くなっている。

今にも儚く消えてしまいそうな彼女に駆け寄りながら、俺は思わず絶叫した。

「ああ、…」

昨日読んだ漫画の叫び声が思わず高さで出てしまつたが、最早自分でも何を言つてゐるか理解していない。

今までの人生で一番の全力疾走をして
られる前に辛うじてキャッチした。

全身で受け止めた華奢な体はとても軽く、意識を失っても手放されなかつた恋文に心のどこかで満足を覚えながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7273o/>

トイレットペーパー戦争

2011年5月15日13時27分発行